３．「広義の中世」の出現期（４世紀後半～８世紀後半）

３．１　西ゴート王国とヴァンダル王国、ブルグント王国の誕生

サーサーン朝ペルシャと平和条約を結び、アタナシウス派キリスト教を国教化したテオドシウス１世は、その後長男アルカディウスを東ローマの共同皇帝に指名し、次男ホノリウスを西ローマの共同皇帝に指名して３９５年に死去する。テオドシウス１世が死去したとき、アルカディウスの年齢は１７歳で、ホノリウスの年齢は１１歳である。総軍司令スティリコがアルカディウスと幼いホノリウスを支え、ローマの軍政を担う。他方、アラリック１世率いるゴート人がトラキア地方北部から西方に移動した。

ゴート人は、ギリシャ各地で略奪を行い、その後イタリア半島に侵入したが、スティリコ率いるローマ軍がポレンティアの戦いとヴェローナの戦いで撃退する。その後スティリコは西ローマの首都をローマ市からラヴェンナ市に移転した。西ローマ皇帝ホノリウスもラヴェンナに移住する。ラヴェンナ遷都後、ラダガイスス率いる別のゴート人一派がイタリア半島に侵入したが、ローマ軍は彼らも撃退する。ラダガイススは戦死するが、このとき、スティリコはガリア地方を防衛していた兵団をイタリア半島に呼び寄せた。そのため、ヴァンダル人やアラン人、ブルグント人やアレマン人がライン川を越えてガリア地方やブリタンニア地方、イベリア半島等に侵入する。他方、アラリック１世率いるゴート人がイタリア半島に再度侵入した（歴史家たちは、これを「ゲルマン人の大移動」と呼ぶ場合がある）。

４０８年、西ローマ皇帝ホノリウスはスティリコを処刑する。スティリコは、処刑される三カ月前に４０００ローマ・ポンド（約１４３０kg）の金でアラリック１世を買収し、ゴート人のイタリア半島侵入を阻止しようとしていた。ホノリウスは買収を口実にしてスティリコを処刑したが、その後ゴート人がイタリア半島に侵入してローマ市を包囲する。ローマ市は５０００ローマ・ポンドの金と３万ローマ・ポンドの銀、その他をアラリック１世に贈与し、侵入を阻止した。だが、金銀等を受け取った後、アラリック１世はドナウ川以西の広大な地域（現在のハンガリーやルーマニア）の割譲をホノリウスに要求する。ホノリウスが要求を拒否したため、ゴート人はローマ市内に侵入し、略奪を行う。そしてホノリウスの妹プラキディアを人質にし、その後イタリア半島を南下して北アフリカを目指す。だが、嵐で船が沈没し、アラリック１世が死去する（コラム１７）。

アラリック１世の死後、アタウルフがゴート人をガリア地方に引率した。４１３年、アタウルフ率いるゴート人はナルボとトロサ、ブルディガラ（現在のナルボンヌ市とトゥールーズ市、ボルドー市）を占領し、対立皇帝ヨウィヌスを捕えてホノリウスに引き渡す。

（４０７年、ホノリウスを見限ったブリタンニア地方のローマ兵団がコンスタンティヌス３世を皇帝に推戴した。その後スティリコを処刑したホノリウスがコンスタンティヌス３世を共同皇帝に指名するが、コンスタンティヌス３世を推戴したローマ兵団は彼の共同皇帝即位に反発する。４１１年、ローマ兵団は版図内に侵入したブルグント人やアラン人と結託してヨウィヌスを擁立した。アタウルフがホノリウスに引き渡したのは、そのヨウィヌスである。ちなみに、コンスタンティヌス３世はホノリウスにも嫌われ、コンスタンティウス将軍率いるローマ軍が彼を捕縛して処刑する）

その後アタウルフは人質にしたホノリウスの妹プラキディアと結婚する。だが、ホノリウスが彼らの結婚に怒る。そしてコンスタンティウス将軍率いるローマ軍がナルボンヌの港湾を封鎖し、穀物の搬入を阻止する。金銀と穀物の交換が困難になったため、アタウルフはゴート人をイベリア半島に引率したが、その後殺害された（殺害の原因は怨恨である）。

アタウルフの死後、ワリアがゴート人を率いる。ワリアはプラキディアをホノリウスの元に送り返し、ローマから穀物を獲得した。その後イベリア半島各地でヴァンダル人やアラン人を攻撃する。４１８年、ホノリウスはガリア・アクィタニア属州とガリア・ナルボネンシス属州（概ね現在のフランス共和国アキテーヌ地方）でのゴート人定住を認める。ワリアは西ゴート王国を開国し、トロサ（トゥールーズ市）を首都にして死去する。

ワリアの死後、アラリック１世の庶子テオドリック１世（在位４１８～４５１年）が西ゴート王に即位し、他方、４２９年にガイセリック率いるヴァンダル人とアラン人が北アフリカに移動する。４３９年、ガイセリックはカルタゴを占領してヴァンダル王国を開国する。

（アラリック１世率いるゴート人は流浪の民である。アラリック１世は、５０００ローマ・ポンドの金と３万ローマ・ポンドの銀、その他を受け取っても西ローマ版図の割譲を要求するしかなかった。アラリック１世は、ホノリウスが要求を拒否した場面で北アフリカ渡航を決断したように思う。ローマ市に侵入したのは、おそらく後顧の憂いを断つためである。アラリック１世の後を継いだアタウルフは、嵐で船が沈没したため、北アフリカ渡航を断念してゴート人をガリア地方に引率するしかなかった。ホノリウスがアキテーヌ地方での定住を認めた場面で、ゴート人は安住の地を得たといえるが、すべてのゴート人がトラキア地方北部から移動したわけではない。以後、アキテーヌ地方に移動したゴート人を「西ゴート人」と呼ぶ）

ホノリウスの元に戻ったプラキディアは、コンスタンティウス将軍と再婚して一男一女を出産したが、その後コンスタンティウス将軍が死去すると、ホノリウスがプラキディアに求婚する。求婚を拒否したプラキディアは、子供たちを連れてコンスタンティノープルに逃れる。当時の東ローマは、408年にアルカディウスが死去し、彼の嫡男テオドシウス2世が皇帝に即位していた。テオドシウス2世はプラキディアと子供たちを受け入れる。

（アルカディウスの死後、彼の嫡男テオドシウス2世が7歳で東ローマ皇帝に即位した。重臣アンテミウスが彼を支える。アンテミウスは、サーサーン朝ペルシャと新たな平和条約を結び、版図内に侵入したフン人を撃退してドナウ川西岸の防衛体制を強化する。他方、新たな城壁を築いてコンスタンティノープルの面積を二倍に拡大した。また、商人を優遇してエジプト以外の地域からの穀物搬入を可能にした。そして368～407年までの延滞税を免除した後、隠遁する。西ローマは、有能な重臣スティリコを処刑したが、東ローマは有能な重臣アンテミウスが軍事と執政を担った、といえる。ちなみに、ホノリウスはテオドシウス2世の即位に反対している。筆者は、ホノリウスがスティリコを処刑した真の原因は、スティリコがテオドシウス2世の即位に賛成したためである、と考える）

423年、西ローマ皇帝ホノリウスが死去する。元老院議員ヨハンネスが西ローマ皇帝に即位するが、東ローマ皇帝テオドシウス2世は彼の即位を認めない。425年、アスパル将軍率いる東ローマ軍がラヴェンナを襲撃し、ヨハンネスを殺害してプラキディアが出産した6歳の男子が西ローマ皇帝ウァレンティニアヌス3世に即位する。西ローマで、プラキディアの摂政がはじまった。

殺害される前、西ローマ皇帝ヨハンネスはフラウィウス・アエティウスをフン人の元に派遣して援軍を求めていた。だが、アエティウスがフン人の援軍を率いて西ローマに戻ったのは、ヨハンネスが殺害された後である。アエティウスはアスパルと和睦し、フン人の援軍を送り返してプラキディアと和解する。その後アエティウスはガリア地方でゴート人やブルグント人、フランク人等と戦うが、他方、北アフリカを統治していたボニファティウスと対立する。

427年、ボニファティウスが北アフリカで反乱を起こし、ガイセリックに援軍を要請した。429年にガイセリック率いるヴァンダル人とアラン人が北アフリカに移動したことはすでに述べたが、イベリア半島にいた頃のガイセリックは西ゴート王テオドリック1世と険悪な関係にあった。ボニファティウスから援軍要請を得たガイセリックは、北アフリカに侵攻する口実を得たともいえる。北アフリカ上陸後、ガイセリックは北アフリカ各地を蹂躙する。430年、ボニファティウスは北アフリカから脱出した。

432年、アエティウスは西ローマの執政官に就任したが、彼の就任に反対したボニファティウスと戦い敗北する。その後ボニファティウスは戦傷が原因で死去するが、彼の娘婿セバスティアヌスが総軍司令の地位に就いて戦闘を継続し、アエティウスはフン人の元に逃亡する。そして翌433年、フン人の大軍を率いて西ローマに侵攻した。セバスティアヌスは東ローマに亡命し、その後アエティウスは総軍司令に就任して未亡人になったボニファティウスの妻ペラギアと結婚する。アエティウスは、ボニファティウスとペラギアが所有していた広大な土地と財産を得、私兵団＝ブッケラリィを編成する。

（アエティウスは、フン人の大軍を率いる場面で、フン人の長ルーアに広大なパンノニア属州＝パンノニア平原の割譲を約束した。ルーアは大満足したと思う。遊牧民にとって、パンノニア平原はユーラシア大陸西部最良の放牧地である。ルーアの死後、ブレダとアッティラの兄弟がフン人の長になる。439年、ブレダとアッティラ率いるフン人が東ローマに侵入し、ギリシャを蹂躙した。そして443年、東ローマ軍を撃破してコンスタンティノープルに迫る。テオドシウス2世が6000ローマ・ポンドの金をブレダに支払い、フン人の軍勢は引き返す。その後しばらくしてブレダが死去し、アッティラがフン人唯一の長になる。余談であるが、ブレダとアッティラはルーアの弟ムンズクの息子たちである。今のハンガリー国歌に、ムンズクの名が登場する）

ところで、対立皇帝ヨウィヌスが即位した場面で、彼と結託したブルグント人の王はグンダハール（グンテル）、アラン人の王はゴールである。アタウルフがヨウィヌスをホノリウスに引き渡した後、ホノリウスはグンダハールと休戦協定を結びライン川西岸＝ヴォルムス（ラインラント）での定住を認めた。だが、その後グンダハールはガリア・ベルギガ属州北部（概ね現在のベルギーとオランダ、ルクセンブルク）を襲撃する。

436年、当時の西ローマを事実上支配していたアエティウスが私兵団＝ブッケラリィを投入してグンダハール率いるブルグント人を撃退する。そして翌437年、フン人の傭兵団を投入してライン川西岸を襲撃した。グンダハールは戦死し、ブルグント人の共同体が壊滅する（この襲撃は、後に「ニーベルンゲンの歌」の題材になるが、2万人のブルグント人が殺害されたと伝えられている）。

その後の戦い、すなわちアエティウス率いる私兵団とブルターニュ半島のバガウダエ（反乱農民）との戦いやアエティウス配下のリトリウスと西ゴート王テオドリック1世の戦闘等は割愛する。重視すべきことは、アエティウスがアラン人に現在のフランス北東（オルレアン付近）での定住を認め、生き残ったブルグント人にフランス南東（サヴォワ）での定住を認めたことである。そして彼らに同盟部族の地位も与えたことである。フランス南東に定住したブルグント人は、グンダハールの嫡男グンディオクを王に推戴した。グンディオクはブルグント王国を開国し、ヴィエンヌを首都にする。そして451年、カタラウヌムの戦いが勃発した。

ところで、グンディオクがブルグント王国を開国したのは、ワリアが西ゴート王国を開国してから約四半世紀後である。メロヴィング朝フランク王国の開国はさらに遅い。したがって、西ゴート王国とブルグント王国、フランク王国を同列に論じることはできないが、カタラウヌムの戦いではゴート人とブルグント人、フランク人がアエティウス下の西ローマ軍と連合軍を形成し、アッティラ率いるフン人の軍勢と戦った。サクソン人＝ザクセン人も連合軍に参加している。

カタラウヌムの戦いの勝敗は不明で、死者数も不明である。会戦後、西ゴート王テオドリック1世が戦死し、アッティラ率いるフン人の軍勢が引き返す。その後フン人はイタリア半島北部に侵攻し、アクレイアを破壊して略奪を繰り返す。そして453年、アッティラが死去する。

（カタラウヌムの戦いは、ウァレンティニアヌス3世に元老院議員との婚約を強いられた彼の姉ホノリアが指輪を添えて助けを求める書状をアッティラに送ったときからはじまる。アッティラは、ホノリアの書状を「求婚」と理解した。ウァレンティニアヌス3世は、ホノリアを幽閉し、求婚の合法性を否定する書状をアッティラに送ったが、アッティラは、求婚は合法であり、ホノリアを救出するために西ローマに侵攻すると宣言した。他方、西ローマ版図の半分はホノリアのもので、彼女の持参金でもあると宣言する。アエティウスは、アッティラと親しい間柄であったが、アッティラが西ローマ版図の半分を要求したため、戦うしかなかったように思う。アッティラ後のフン人の動向は不明であるが、アッティラが死去した453年にサーサーン朝ペルシャ王ヤズデギルド2世が宮廷をホラーサーン地方のニ―シャープール市に移し、残りの人生をエフタルとの戦争に費やしている。ヤズデギルド2世の死後、彼の長男ホルミズド3世が即位するが、次男ペーローズ1世（在位459～484年）が反旗を翻し、内戦が勃発した。内戦はペーローズ1世が勝利するが、その後ペーローズ1世はエフタルと三度戦い、三度目の戦争で戦死する。そしてエフタルがホラーサーン地方を占領した。ヤズデギルド2世の代の終わりからペーローズ1世が戦死するまでの約30年、サーサーン朝ペルシャとエフタルの戦争が続いた。私見であるが、大勢のフン人がエフタルの傭兵になり、この「30年戦争」で戦死したように思う。アッティラの死後、フン人が自然消滅したかのように語る歴史家がいる。また、エフタルとフン人を同一視する歴史家もいる（当時のインドでは、エフタルを「フーナ」と呼んでいた）。しかし、彼らはサーサーン朝ペルシャとエフタルの「30年戦争」に言及しない。ちなみに、ペーローズ1世の死後、ヤズデギルド2世の三男バラーシュが即位するが、その後バラーシュは廃位され、ペーローズ1世の長男カワード1世が15歳で即位する。サーサーン朝ペルシャは、カワード1世の代にエフタルからホラーサーン地方を奪還して再興した）

アッティラが死去した同年、アエティウスの息子ガウデンティウスとウァレンティニアヌス3世の娘プラチーディアが婚約したが、その後ウァレンティニアヌス3世はアエティウスの帝位簒奪を疑うようになる。翌454年9月、ウァレンティニアヌス3世はラヴェンナの宮殿で財務報告を行っていたアエティウスを刺殺する。

ウァレンティニアヌス3世にアエティウス殺害を唆したのは、元老院議員ペトロニウス・マクシムスである。マクシムスは、アエティウスがいなくなれば総軍司令の地位が自身のものになる、と思っていたようである。だが、ウァレンティニアヌス3世は彼の総軍司令就任を拒否する。翌455年3月、ウァレンティニアヌス3世はアエティウスの部下たちに殺害されたが、彼らを唆したのもマクシムスである。その後マクシムスが西ローマ皇帝に即位するが、同年5月に殺害された（コラム18）。

テオドシウス1世治世下のローマで、中央＝都市部と周辺＝属州が同化して外部が亜周辺化し、他方、貨幣経済が具現する。貨幣経済の下で財貨（金貨や銀貨）と物品貨幣（家畜や穀物）の交換が容易になり、ローマとサーサーン朝ペルシャの交易が活発化した。だが、亜周辺の民衆はローマの最高法規＝アタナシウス派キリスト教やサーサーン朝ペルシャの最高法規＝ゾロアスター教に帰依しない。他方、略奪は物品貨幣より財貨のほうが容易である。貨幣経済は、ローマとサーサーン朝ペルシャの交易だけでなく、亜周辺の民衆の略奪も促進した。ゴート人とフン人の「大移動」はその典型で、サーサーン朝ペルシャとエフタルの「30年戦争」も同様である。

コラム17： ローマ市略奪

歴史上、ローマ市略奪は5回勃発している。最初の略奪は紀元前390年にガリア人＝ケルト人が行った略奪で、本文で述べたアラリック1世率いるゴート人の略奪は2回目の略奪である。3回目の略奪は455年にガイセリック率いるヴァンダル人が行った略奪で、4回目の略奪は546年にトーティラ率いるゴート人＝東ゴート人行った略奪である。5回目の略奪は、1527年にドイツの傭兵団＝ランツクネヒトが行った略奪である。

3回目の略奪は次のコラム18で述べる。本書では、4回目の略奪と5回目の略奪にも言及するが、略奪の被害や規模等の説明はしない。

コラム18： 3回目のローマ市略奪

カタラウヌムの戦いが勃発する前年、ウァレンティニアヌス3世の母プラキディアと東ローマ皇帝テオドシウス2世が死去する。テオドシウス2世の死後、マルキアヌスが東ローマ皇帝に即位した。他方、アッティラが死去した翌454年にアエティウスが殺害され、翌455年に西ローマ皇帝ウァレンティニアヌス3世が殺害された。そしてペトロニウス・マクシムスが西ローマ皇帝に即位する。

西ローマ皇帝マクシムスは、未亡人になったウァレンティニアヌス3世の妻エウドクシアと再婚し、彼女の娘エウドキアと自身の息子パラディウスを結婚させた。だが、エウドキアはヴァンダル王ガイセリックの息子フネリックと婚約していた。エウドキアは、ヴァンダル王国に助けを求める。

455年5月、ガイセリック率いるヴァンダル人がイタリア半島に上陸する。混乱した民衆がマクシムスとパラディウスを殺害し、ヴァンダル人がローマ市を略奪した。これが、3回目のローマ市略奪である。

その後皇女エウドキアはフネリックと結婚し、ヴァンダル王国で暮らすが、当時、エウドキアの妹プラキディアがオリブリオスと結婚していた。ヴァンダル王ガイセリックにとって、ウァレンティニアヌス3世後の西ローマ皇帝は息子のフネリックか、あるいはプラキディアの婿オリブリオスでなければならない。民衆がマクシムスとパラディウスを殺害したのは、ガイセリックが彼らの死を望んでいる、と考えたからである。だが、配下のヴァンダル人がローマ市を略奪したため、ガイセリックの目論見が頓挫する。マクシムスの死後、元老院議員アウィトゥスが西ローマ皇帝に即位する。

３．２　東ゴート王国とメロヴィング朝フランク王国の誕生

４５６年、ヴァンダル人がイタリア半島南部のカプアを破壊し、シチリア島に上陸した。リキメル将軍が防戦し、コルシカ島沖の海戦で撃破する。だが、その後リキメル将軍は西ローマ皇帝アウィトゥスに反旗を翻す。アウィトゥスはイタリア半島北部に逃れ、西ゴート王国等の支援を得てリキメル率いる軍勢と戦ったが敗北し、４５７年に死去する。その後マヨリアヌス将軍が西ローマ皇帝に即位する。「蛮人（フランク人）」出身のリキメルは皇帝即位を辞退した。

西ローマ皇帝マヨリアヌス（在位４５７～４６１年）は税制改革と行政改革を行い、西ゴート王国の侵攻等を防いだが、北アフリカ遠征に失敗し、リキメルに殺害された。その後リキメルは元老院議員セウェルスを西ローマ皇帝に擁立したが、ガリア地方に赴任していたアエギデウス将軍、イリュリクム地方（アドリア海沿岸＝ダルマチアを含むバルカン半島南西部）に赴任していたマルケリヌス将軍等がセウェルスの即位に反発する。ヴァンダル王ガイセリックも反発し、シチリア島やイタリア半島沿岸各地を襲撃する。

アエギデウス将軍やマルケリヌス将軍が反発した後、東ローマがイリュリクム地方を支配する。そして４６５年、セウェルスが死去し、西ローマの帝位が空位になる。東ローマ皇帝レオ１世が、軍司令アンテミウスをイタリア半島に送る。アンテミウスは西ローマ皇帝即位を宣言したが、その後北アフリカ遠征に失敗し、西ゴート王国との戦いでも敗北する。そしてリキメルとの内戦が勃発し、リキメルがアンテミウスを処刑する。４７２年７月、リキメルはガイセリックが待ち望んでいたオリブリオスを西ローマ皇帝に即位させ、同年８月に死去する。だが同年１０月、オリブリオスも死去する。

その後グリケリウスが西ローマ皇帝に即位するが、東ローマ皇帝レオ１世がユリウス・ネポスをイタリア半島に送る。グリケリウスは退位し、ネポスは西ローマ皇帝に即位するが、軍司令オレステスの反乱が勃発した。ネポスはイリュリクム地方に逃れ、オレステスは息子のロムルス・アウグストゥルスを西ローマ皇帝に擁立する。だが、オドアケル将軍がオレステスを殺害し、ロムルス・アウグストゥルスを廃位して、当時の東ローマ皇帝ゼノンに「もはや西方担当皇帝は必要なし」との書簡を送る。彼は西ローマ皇帝の帝冠と紫衣も送った（ちなみに、オドアケルはロムルス・アウグストゥルスを殺害しなかった。退位後、ロムルスは優雅な余生を送る）。

オドアケルのロムルス・アウグストゥルス廃位は、西ローマの滅亡を意味するが、西ローマはテオドシウス朝が断絶した場面（ウァレンティニアヌス３世が死去した場面）でガリア地方とイベリア半島、北アフリカを失っていた。版図を大きく縮小した西ローマは「力」を失い、滅亡は時間の問題であった、と論じる歴史家が多い。

だが、テオドシウス朝断絶後に即位した西ローマ皇帝は、全員、金貨を発行している。オドアケルでさえ、金貨を発行している。金貨や銀貨を鋳造して発行する者が最初に金貨や銀貨を使用する。この権利は絶大で、支配者あるいは支配者階級の「力」の源泉でもある。金貨の発行が、衰退した西ローマを支え続けていた。ガリア地方やイベリア半島、北アフリカを占領した「ゲルマン人」たちも西ローマ皇帝が発行する金貨に依存し続けていた。

（５世紀末、西ゴート王アラリック２世が金貨を発行したが、おそらく「メダル」である。当時の西ゴート人はアリウス派キリスト教の信徒であったが、アリウス派キリスト教会は金融＝金銀交換を担っていない。貨幣経済は貨幣交換の下で成立するが、アラリック２世が発行した金貨と銀貨の交換は困難であったように思う。アラリック２世は、ヴイエの戦いでメロヴィング朝フランク王クロヴィスに大敗し、戦死する。その後西ゴート王国はアキテーヌ地方を失い、首都をトゥールーズからイベリア半島南東のバルセロナに移す）

時計を少し戻す。東ローマでは、４５０年にテオドシウス２世が死去する。４２５年にラヴェンナを襲撃してヨハンネスを殺害し、ウァレンティニアヌス３世を擁立したアスパルが部下のマルキアヌスをテオドシウス２世の姉プルケリアと結婚させ、彼を東ローマ皇帝に擁立した。だが、西ローマ皇帝マクシムスはマルキアヌスの東ローマ皇帝即位を認めない。他方、マルキアヌスはマクシムスの西ローマ皇帝即位を認めない。

東ローマ皇帝マルキアヌスは、４５１年にカルケドン公会議を開催してアタナシウス派キリスト教会の結束を固める。以後、アタナシウス派を「カルケドン派」と呼ぶが、カルケドン公会議では、アリウス派を排斥し、カルケドン派同様三位一体説を主張したネストリウス派も排斥している。その後マルキアヌスは、トラキア地方北部のゴート人と同盟を結び、フン人の侵入を阻止した後、４５５年に勃発したガイセリック率いるヴァンダル人のローマ市略奪とマクシムスの死を黙認する。

マルキアヌスの死後、元老院はアスパル将軍を皇帝に指名するが、「蛮人（フランク人）」出身のアスパルは辞退し、部下のひとりを擁立した。アスパルが擁立した東ローマ皇帝レオ１世は、上で述べた北アフリカ遠征を行うが大敗する。その後レオ１世の娘アリアドネの婿ゼノンが民衆を扇動してアスパルを殺害する。４７４年、レオ１世が死去し、彼の孫（ゼノンの息子）が７歳で東ローマ皇帝レオ２世に即位するが、同年死去する。そしてレオ２世の父ゼノンが東ローマ皇帝に即位する。

４７５年、ゼノンの即位に不満を持つレオ１世の義弟バシリスクスが反乱を起こす。ゼノンはコンスタンティノープル

を離れ、故郷のイサウリア地方に避難した。その後反乱軍で内紛が勃発し、ゼノンはコンスタンティノープルに戻りバシリスクスを処刑する。479年、レオ1世の娘レオンティアと彼女の夫マルキアヌスが反乱を起こしたが、イルス将軍が鎮圧する。しかし484年、イルス将軍がゼノンの廃位とレオンティウス将軍の即位を主張して反乱を起こす。彼らはイサウリア地方で籠城し、レオ1世の妻ウェリナが彼らを支持した。ゼノンは執政官テオドリック下のゴート人兵団をヨハンネス将軍に与えてイサウリア地方に送り、他方、コトメネス将軍を総軍司令に任命する。

486年、配下のゴート人兵団を取られ、総軍司令就任の道も閉ざされたテオドリックが反乱を起こす。そして487年、コンスタンティノープルを包囲した。ゼノンは、テオドリックの副帝就任を約束し、イルスとレオンティウスの反乱に加担したオドアケルの討伐を依頼する。488年、テオドリック率いる軍勢がイタリア半島に向かう。

（オドアケルがイルスとレオンティウスの反乱に加担したとの証拠はない。密約があったとの説もあるが、疑わしい。テオドリックも、そのように認識していたように思う。しかし、彼はゼノンに従う。おそらく、テオドリックは東ローマから離れてイタリア半島で君臨するつもりでいた。ちなみに、一部の歴史家が、テオドリックが率いた兵団を「東ゴート人」兵団と呼んでいるが、兵員の大多数がローマ人である）

491年、ゼノンが死去し、ゼノンの妻アリアドネと結婚したアナスタシウスが東ローマ皇帝に即位する。そして493年、テオドリックが副帝の地位を利用してオドアケルを殺害する。497年、東ローマ皇帝アナスタシウスは西ローマ皇帝の帝冠と紫衣をテオドリックに送り皇帝大権を与えた。しかしテオドリックが皇帝即位を宣言する場面はない。テオドリックは「王」になる。以後、テオドリックが支配する西ローマ（概ねイタリア半島全域）を「東ゴート王国」と呼ぶ（コラム19）。

他方、アナスタシウスは508年にメロヴィング朝フランク王クロヴィスを名誉執政官に任命する。そして518年に死去する。その後ユスティヌスが即位し、彼の死後、彼の甥ユスティニアヌス1世が即位する。以後、本書では、東ローマを「ビザンツ帝国」と呼ぶ。

ところで、コンスタンティヌス朝最後のローマ皇帝ユリアヌスが副帝に即位してライン川以西のガリア地方を統治した時期（355～360年）があった。アカデメイアの学徒であったユリアヌスの統治は公正で、兵士の支持と民衆の信頼を得ていたように思う。358年、ユリアヌスは帝国防衛の要となるガリア・ベルギガ属州＝フランドル地方に駐屯地をつくり、彼を慕うサルマタイ人の末裔、ケルト系やペルシャ系の傭兵たちを配置した。これが、サリー・フランク人のはじまりである。

ユリアヌスの死後、409年にガリア地方とブリタンニア地方、イベリア半島が西ローマから離反した後、ブルグント王グンダハールがフランドル地方を襲撃するが、サリー・フランク人は残る。そしてライン川以東から侵入したライン・フランク人を糾合する。サリー・フランク人がライン・フランク人を糾合した場面の長が、おそらくメロヴィング朝の開祖メロヴィクスである。

以後、サリー・フランク人とライン・フランク人をまとめて「フランク人」と呼ぶが、メロヴィクス率いるフランク人はカタラウヌムの戦いで西ローマ軍の一翼を担った。その後約8年、メロヴィクスの息子キルデリクが東ローマ皇帝マルキアヌスあるいはアスパル将軍の下で軍務に励む。マルキアヌスの死後、キルデリクはフランドル地方に戻るが、そのときの連子が息子のクロヴィスと娘のアウドフレダである。

（キルデリクは、メロヴィクスに8年間追放されていたとの説もあるが、疑わしい。筆者は、アスパル将軍がキルデリクを呼び寄せたように思う。アスパル将軍もフランク人である。東ローマ皇帝マルキアヌスが死去した同年、メロヴィクスも死去したといわれているが、これも疑わしい。筆者は、キルデリクがメロヴィクスを殺害したように思う。そして、キルデリクの息子クロヴィスと娘アウドフレダは、高貴な血を継いでいたと考える。クロヴィスとアウドフレダは、キルデリクの実子ではなく、サリー・フランク人が慕ったユリアヌスの子孫かもしれない）

481年、キルデリクが死去し、クロヴィスがフランク人を率いる。そして486年、ソワソンの戦いでシアグリウス率いる西ローマ兵団の残党を撃破し、フランドル地方全域を支配した。その後493年にアウドフレダが東ゴート王テオドリックに嫁ぎ、同年、クロヴィスはブルグンド王キルペリク2世の娘クロティルダを娶る（ちなみに、シアグリウスは西ローマ皇帝マヨリアヌスの命を受けてガリア地方に赴任したアエギデウス将軍の嫡男で、フランドル地方北部で軍閥を形成していた）。

496年、ライン川中流を支配していたアレマン人がガリア地方に侵入した。クロヴィス率いるフランク人がアレマン人を撃破し、クロヴィスはファルツ地方とアルザス・ロレーヌ地方を獲得する。その後クロヴィスは妻クロティルダの薦めでローマ教会の洗礼を受ける。

507年、クロヴィス率いるフランク人はヴイエの戦いで西ゴート王アラリック2世率いるゴート人を破り、アキテーヌ地方を占領する。その後西ゴート王国はバルセロナに遷都し、メロヴィング朝フランク王国はパリに遷都する。だが511年、クロヴィスが死去する。クロヴィスの死後、メロヴィング朝フランク王国は分裂した（コラム20）。

とはいえ、メロヴィング朝は約270年続いた。理由は、ローマ市民の末裔＝セナトール貴族とローマ教会が存在し

たからである。クロヴィスがメロヴィング朝フランク王国を建国したが、フランク人が占める王国人口の割合は5パーセント程度である。したがって、実質的な支配者層はセナトール貴族で、彼らの多くがローマ教会の世俗司祭になり、荘園を経営した。

歴史家たちは、メロヴィング朝フランク王国を「封建国家」と呼ぶ場合があるが、筆者は同意できない。ユスティニアヌス1世下のビザンツ軍がイタリア半島に進軍して東ゴート王国と戦火を交えた際、「漁夫の利」を得ようとしたフランク人の一部が東ゴート王国に侵入した。だが、メロヴィング朝は彼らの行動を制止していない。封建制は分権体制であるが、統治制度でもある。封建制下でも、勝手な侵略や略奪は許されない。ローマ教会がメロヴィング朝とセナトール貴族の関係を維持したが、封建的主従関係と呼ぶにはほど遠いものであった。

（クロヴィスは、クロティルダの薦めでローマ教会に改宗したが、大げさなことではない。彼は異教徒ではなかったし、アリウス派キリスト教徒でもなかった。彼が幼少期を過ごしたのはコンスタンティノープルである。すなわち、クロヴィスは同じカルケドン派のコンスタンティノープル教会からローマ教会に改宗したにすぎない。東ローマ皇帝ゼノンが、カルケドン会議で否定した単性説をコンスタンティノープル教会に持ち込んだ後、両性説を堅持するローマ教会とコンスタンティノープル教会の対立が勃発したが、クロヴィスにとって、単性説と両性説のちがいなどどうでもよいことであったと思う。当時のガリア地方で金融＝金銀交換を営んでいたのはローマ教会である。貨幣経済の下でメロヴィング朝を維持するには、クロヴィスはローマ教会に改宗するしかなかった。メロヴィング朝フランク王国は、534年にブルグンド王国を併合するが、ブルグンド王国も金融を必要としていた。ローマ教会の金融支配は拡大し、587年、西ゴート王レカレド1世がアリウス派キリスト教会からローマ教会に改宗する）

コラム19： ボエティウス

東ゴート王テオドリックは善政を施した名君といわれているが、実際に東ゴート王国の執政を担ったのは510年に執政官に就任したボエティウス（480～524年）である。522年、彼の二人の息子も執政官に就任する。ボエティウスに対するテオドリックの信頼は絶大であったが、その後反逆に加担したとの疑いがかけられ、ボエティウスは投獄されて524年に処刑された。獄中のボエティウスが書いた著作が「哲学の慰め」で、内容は擬人化した古代ギリシャ哲学との対話である。

第二次世界大戦中、アウシュヴィッツ（ポーランド名オシフェンチム）のビルケナウ収容所で処刑された修道女エーディト・シュタイン（1891～1942年）は、処刑される直前まで、ボエティウスの研究に勤しんでいる。彼女はブレスラウ（ポーランド名ブロツワフ）生まれのユダヤ人であったが、成人して無神論者になる。ゲオルク・アウグスト大学ゲッティンゲン校でエトムント・フッサールに学んで彼の助手になり、アルベルト・ルートヴィヒ大学フライブルク校に赴く。そこで哲学博士号を授与し、教職に就く。そして1922年、ローマ教会＝カトリック教会に改宗した。しかし1933年、ナチス政権下のドイツで教職を追われ、翌1934年、カルメル修道会の修道女になる。その後オランダに亡命したが、捕えられてビルケナウ収容所に送られた。

エーディト・シュタインは、トマス・アクィナスの著作を翻訳し、「アビラのテレサ」や「十字架のヨハネ」によるカルメル修道会の改革を論考した。彼女の著書「有限存在と永遠存在（水声社）」がまさにそれであるが、筆者は、彼女がビルケナウ収容所でボエティウスの研究に勤しんだことを重視したい。晩年の彼女は数理哲学者である（ひょっとして、人類史上最初の数理哲学者かもしれない）。

1998年、ポーランド人ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が彼女を聖人に列するが、それまで、彼女の評価は芳しくなかった。アメリカのあるユダヤ人団体は、ローマ教会＝カトリック教会に改宗した彼女は「ユダヤ人」ではないなどと誹謗中傷した。筆者の認識では、ハンナ・アーレントにとって、エーディト・シュタインは尊敬すべき先輩である。だが、アーレントがエーディト・シュタインを擁護する場面はない。

ところで、ボエティウスは、アリストテレスのニコマコス倫理学をラテン語に翻訳し、エウクレイデス（ユークリッド）やアルキメデス、クラウディオス・プトレマイオスの数学や物理、天文学や音楽の著作も翻訳した（ボエティウスが、ヨーロッパにアラビア数字を紹介したといわれてもいる）。だが、ボエティウスがニコマコス倫理学を翻訳した場所はローマ市である。彼は青年期にアカデメイアやリュケイオンで古代ギリシャの哲学や自然学を学んだようだが、原本なしでニコマコス倫理学のような大著は翻訳できない。ボエティウスは、どのようにして、ニコマコス倫理学の原本を入手したのか。

紀元前82年に、古代ローマの独裁官に就任したスッラが、アテネ市を略奪した場面でアリストテレスの著作をローマ市に持ち帰ったようだが、アラリック1世率いるゴート人が元老院議場や公会堂を破壊したローマ市にニコマコス倫理学の原本が残っていたとは考えにくい。

コラム14で述べたが、アレクサンドリア教会総主教キュリロスに扇動されたキリスト教徒たちによる新プラトン主義者ヒュパティア殺害を、当時のコンスタンティノープル教会大主教ネストリウスが非難した。彼は、キュリロスに扇動されたキリスト教徒たちの集まりに身の危険を感じ、テオドシウス2世が開催したエフェソス公会議を欠席する。その後修道院で隠遁生活を送り、死去する直前に「ダマスコス（ダマスカス）のヘラクレイデス論」を書く。そしてネストリウスを支持する神学者たちが、サーサーン朝ペルシャ王シャープール1世がカールーン川流域に創立したジュンディーシャープール学院に避難し、古代ギリシャの哲学や自然学、新プラトン主義やスコラ哲学の集大成作業をはじめる。具体的には、新約聖書や旧約聖書と同様な編纂を古代ギリシャの哲学や自然学等に施す作業をはじめた。

（最初に地動説を提唱したのはプラトンの弟子ヘラクレイデスである。ダマスコスのヘラクレイデスは、彼と同一人物ではないかもしれないが、筆者は、古代ギリシャの哲学や自然学を意識してネストリウスが「ダマスコスのヘラクレイデス論」を書いたと考えたい）

ボエティウスが、ジュンディーシャープール学院のネストリウス派神学者たちからニコマコス倫理学の原本を入手していた可能性がある。同じことが、エウクレイデスやアルキメデス、クラウディオス・プトレマイオスの著作についてもいえる。

歴史家たちは、テオドリックがボエティウスを処刑したのは、テオドリックがアリウス派キリスト教徒で、ボエティウスがカルケドン派キリスト教徒であったためである、と論じる場合がある。だが、テオドリックはローマ教会の存在を認め融和的でさえあった（そうしなければ、東ゴート王国で金融＝金銀交換が成立しない）。そのようなテオドリックが、宗派のちがいを理由にボエティウスを処刑するはずがない。

テオドリックが嫌ったのは、おそらくギリシャである。あるいは古代ギリシャの哲学や自然学、新プラトン主義やスコラ哲学である。テオドリックにとって、ボエティウスは「異教徒」であった。

コラム20：　サリカ法典

クロヴィスは、サリカ法典を編纂してメロヴィング朝フランク王国を統治した。歴史家の加納修氏によれば、サリカ法典はひとつの例外（熱湯の中にある物を取り出して得る神判）を除き、各刑罰の贖罪金＝罰金を定めた刑法体系である（したがって、投獄や死刑、追放や決闘などの規定はない）。贖罪金＝罰金はすべて被害者が受け取る。

同時代の西ゴート王国やブルグント王国にも法典は存在したが、加納修氏によれば、刑罰の罰金等は定めていない。罰金刑があり、投獄や死刑、追放や決闘などの規定がないサリカ法典の「不思議」は、ローマ的かゲルマン的かといった基準でしばしば論じられているが、筆者は、貨幣経済を重視したい。貨幣経済は国教＝最高法規下の制度である。ローマ教会＝カトリック教会に改宗したクロヴィスは、国教＝最高法規の下でサリカ法典を編纂した。すなわち、サリカ法は、中世の最高法規主義＝文治主義の下で変貌した慣習法である。

３．３ ビザンツ皇帝ユスティニアヌス１世とサーサーン朝ペルシャ王ホスロー１世

５２７年、ユスティニアヌス１世（在位５２７～５６５年）がビザンツ皇帝に即位する。５３２年、即位後の内乱＝ニカの乱を制圧したユスティニアヌス１世は、サーサーン朝ペルシャ王ホスロー１世（在位５３１～５７９年）と永久平和条約を結び、ユーフラテス川上流以西を防衛していたビザンツ軍を北アフリカに派兵した。名将ベリサリウス率いるビザンツ軍がヴァンダル人を破り、北アフリカとシチリア島やサルデーニャ島、イタリア半島南部を奪還する。以後、ヴァンダル人の海賊行為がなくなった。だが、北アフリカは復興しなかった。

ユスティニアヌス１世治世下のビザンツ帝国は強固な中世帝国になっていた。しかも軍政と民政を分割しているため、北アフリカを奪還したベリサリウスはその後の北アフリカ統治に関与できない。他方、新たに赴任した文官たちは「ローマの法」を適用する。とりわけ同じ税制を導入する。だが、北アフリカはヴァンダル人が占領して約１００年経過している。ビザンツ帝国の文官たちは、おそらくヴァンダル人が課した税より重い税＝人頭税等を北アフリカの民衆に課した。重税に苦しむ自由農民が農地を手離してもおかしくない。奪還後、北アフリカの農地が砂漠化する。

中世帝国では、頂点に立つ皇帝だけが必要に応じて軍政と民政を束ね、状況に応じて民政を中央と周辺に分割できる。したがって、歴代ローマ皇帝は軍と共に転戦し、戦後の属州統治にしばらく関与した。だが、ユスティニアヌス１世がコンスタンティノープルから離れて属州に出向く場面はない。にもかかわらず、ユスティニアヌス１世は「異教徒が集う場所」であるとの理由でプラトンが開校したアカデメイアを潰し、アリストテレスが開校したリュケイオンも潰す。そしてコンスタンティヌス朝期のローマ版図を復元しようとする。彼はローマ法大全＝ユスティニアヌス法の編纂も命じた。

（サーサーン朝ペルシャ同様、ビザンツ帝国も国教の下で多様な慣習法を統合し、テオドシウス2世の代に法典＝テオドシウス法を編纂して慣習法体系を構築した。ユスティニアヌス１世が編纂を命じたユスティニアヌス法は慣習法の集大成である。ユスティニアヌス法典は、ユスティニアヌス１世の死後完成するが、ビザンツ帝国は約４００年後に国法＝バシリカ法を制定してユスティニアヌス法を卑俗法化する。だが、ユスティニアヌス法は「国法」の制定が遅れたヨーロッパ諸国で長く残る）

５２６年、東ゴート王テオドリックが死去する。テオドリックの死後、彼の娘アスマランタが女王に即位するが、テオドリックの甥テオダハドが彼女を殺害して東ゴート王に即位する。その後テオダハドを追放したウィティギスが東ゴート王に即位するが、ユスティニアヌス１世はイタリア半島の併合を望んでいた。５３５年、ユスティニアヌス１世はベリサリウスにイタリア半島への侵攻を命じる。口実は、アスマランタ殺害である（北アフリカ派兵も同様であった。ビザンツ軍の北アフリカ派兵は、ヴァンダル王ヒルデリックの王位を彼の従弟ゲリメルが簒奪したときからはじまる）。

経緯は割愛するが、ベリサリウス率いるビザンツ軍はナポリを占領し、ローマ市を占領した。そして５３９年、ラヴェンナを占領する。だが５４０年、ユスティニアヌス１世はベリサリウスを召還し、サーサーン朝ペルシャとの戦闘を強いる。

（ベリサリウスは、ヴァンダル王ゲリメルを捕縛した後、コンスタンティノープルに送っている。５４０年に召還された場面では、東ゴート王ウィティギスをコンスタンティノープルに伴っている。ゲリメルもウィティギスもコンスタンティノープルで天寿を全うした。ベリサリウスのヴァンダル王や東ゴート王に対する寛大さは、後のヨーロッパの武人に多大な影響を及ぼしたように思う。だが、ユスティニアヌス１世はそのようなベリサリウスに謀反の疑いをかけていた）

ユスティニアヌス１世と同時代のサーサーン朝ペルシャ王はホスロー１世であるが、ユスティニアヌス１世が即位する以前、すなわちアナスタシウス帝やユスティヌス帝と同時代のサーサーン朝ペルシャ王はカワード１世である。

前々節で述べたが、第十六代サーサーン朝ペルシャ王ヤズデギルド2世の死後、王位を争う内戦が勃発した。内戦を制圧して王位を獲得したペーローズ１世は、その後エフタルと三度戦い戦死する。ペーローズ１世の死後、ヤズデギルド2世の三男バラーシュが即位する。バラーシュは四男ザリルの反乱を鎮圧したが、その後廃位され、ペーローズ１世の長男カワード１世（在位４８８～５３１年）が１５歳で即位する。

当時のサーサーン朝ペルシャは、内戦やアルメニア王国の反乱と離脱、エフタルとの戦いで疲弊し、中央主権体制が形骸化していた。カワード１世は、有力貴族が擁立した傀儡である。だが、経緯は割愛するが、成人したカワード１世は有力貴族の支配を打破して中央主権体制を再構築する。

カワード１世が再構築した中央主権体制は、新たに台頭してきた中小地主階級＝デフカーンと新たに制定した人頭税に大きく依存している。中小地主階級の子弟が常備軍＝国軍を編成し、人頭税＝国税が有力貴族の台頭を抑止した。他方、インド交易を支配する。すなわち、サーサーン朝ペルシャがインドとヨーロッパやアフリカの海上交易を支配する。

カワード１世下のサーサーン朝ペルシャは、ペーローズの代に失ったホラーサーン地方をエフタルから奪還し、他

方、西方でビザンツ帝国との戦闘を繰り返す。だが、531年にカワード1世が死去し、後を継いだホスロー1世がユスティニアヌス1世と永久平和条約を締結する。

ホスロー1世は、カワード1世治世下で勃興した新興宗教＝マズダク教を弾圧したが、概ね異教に寛容であった。彼はチグリス川を灌漑し、版図内の都市と道路を整備した。また、アカデメイアおよびリュケイオン廃校後、アテネの学者たちをジュンディーシャープール学院に受け入れる（おかげで古代ギリシャの哲学や自然科学が残る）。ホスロー1世の治世下で、サーサーン朝ペルシャの穀物生産量が増大し、交易量も増大する。

539年、東ゴート王ウィティギスはホスロー1世に使節を送り、ビザンツ帝国との戦闘再開を依頼する。目的はベリサリウス率いるビザンツ軍の撤退であった。依頼は間に合わなかったが、ホスロー1世下のサーサーン朝ペルシャ軍はビザンツ帝国に侵攻した。上で述べた、540年のベリサリウス召還はそのためである（ベリサリウスは541年に対ペルシャ戦線に赴任するが、542年に再び召還され、コンスタンティノープルに戻っている。おそらく、ウィティギスがホスロー1世に依頼した戦闘再開に関与した、と疑われたように思う）。

だが543年、コンスタンティノープル市で疫病が蔓延する。疫病はアナトリア半島や北レヴァントで戦うビザンツ軍とサーサーン朝ペルシャ軍にも蔓延した。戦闘は小康状態に陥り、562年、ビザンツ帝国とサーサーン朝ペルシャは戦闘を終結する。その後ホスロー1世は突厥のイステミ・カガン（室点蜜可汗）と同盟を結び、エフタルを滅ぼす。サーサーン朝ペルシャがガンダーラ地方を支配し、突厥がバクトリア地方＝中央アジアを支配した。だが567年、イステミ・カガンが要請した絹の陸路輸送をホスロー1世が拒否したため、サーサーン朝ペルシャと突厥の関係が悪化する。ホスロー1世は579年に死去するが、572年にビザンツ帝国と突厥が同盟を結び、サーサーン朝ペルシャを挟撃しはじめる（コラム21）。

（突厥が絹を製造していたわけではない。突厥は、おそらく北周に陸路での絹の輸送を命じられた。当時の北周は後述する武帝が即位して中国全土の統一を目指している。北周にとって、絹は財貨であり、武帝はビザンツ皇帝が発行する金貨＝ベサントとの交換を望んだように思う。だが、サーサーン朝ペルシャがインドとヨーロッパやアフリカの海上交易を支配している。ホスロー1世にとって、中国産の絹は海路でインドからヨーロッパやアフリカに輸送すべきものであった。ちなみに、インド洋は年間を通して東から西に季節風（モンスーン）が吹くが、7月と8月の夏期に風向きが西から東に変わる。海流も逆流する。当時のペルシャ商人は、7月と8月の夏期にダウ船でインドや東南アジアに渡航したように思うが、中国への渡航は南朝の陳＝江南までが限界だったかもしれない）

イタリア半島では、541年にトーティラが東ゴート王に即位し、ビザンツ軍が占領した各地を奪還しはじめる。544年、ユスティニアヌス1世は再度ベリサリウスをイタリア半島に送るが、ベリサリウスに官職はなく、率いる軍勢は少数である（ベリサリウスは支援を求める手紙をコンスタンティノープルに送ったが、ユスティニアヌス1世は黙視した）。

546年、トーティラ率いる東ゴート人がローマ市を占領する。トーティラは和平を提示したが、ユスティニアヌス1世は拒否する。そのため4回目のローマ市略奪が勃発した。547年、ベリサリウスは荒廃したローマ市を奪還したが、ユスティニアヌス1世は再びベリサリウスを召還する（その後ベリサリウスはドナウ川を越えて侵入したスラブ人を撃退し、隠遁した）。

551年、宦官ナルセスがビザンツ軍総軍司令に就任する。ユスティニアヌス1世は多額の軍資金をナルセスに与え、イタリア半島への侵攻を命じた。ナルセスは3万5000の軍勢でイタリア半島に侵攻する。552年、トーティラ率いる東ゴート人はイタリア半島中部でナルセス率いるビザンツ軍と戦うが、敗北し、トーティラは戦死する。その後ビザンツ軍はテーイア率いる東ゴート人をナポリ市近郊で壊滅し、553年にイタリア半島に侵入したアラマンニ人とフランク人も撃破する。そして562年、東ゴート人最後の反乱を鎮圧し、イタリア半島を征服した。

（ナルセスは、ユスティニアヌス1世から得た軍資金でランゴバルド人を雇った。ランゴバルド人は勇敢に戦ったが、略奪も行った。トーティラの死後、蛮行を嫌うナルセスはランゴバルド人を追放する。ランゴバルド人はユトランド半島から南下してドナウ川以南に定住したゲルマン人部族で、カタラウヌムの戦い後、フン人を追い出してドナウ川以北を支配していたゲルマン人部族ゲピト人と敵対していた。ナルセスに追放されたランゴバルド人はドナウ川以南に戻り、再度ゲピト人と敵対する。そして、東方から侵入してきた遊牧民アヴァール人と同盟を結び、ゲピト人を壊滅する。だが、その後アヴァール人に圧迫され、再度イタリア半島に向かう。しかし、アヴァール人がイタリア半島に向かう場面はない。アヴァール人は突厥に追われた柔然で、おそらくフン人や様々な部族を糾合していた。アヴァール人はパンノニア地方に定住し、遊牧生活を200年以上営む。ちなみに、ビザンツ帝国に養蚕が伝わったのはこの頃である。アヴァール人＝柔然が何らかの役割をはたした可能性がある）

565年、ユスティニアヌス1世が死去し、ユスティヌス2世が即位する。イタリア遠征に多額の軍資金を投入したビザンツ帝国は財政が破綻していた。ユスティヌス2世は、ナルセスを解任し、イタリア半島に駐屯するビザンツ軍を削減する。568年、アヴァール人に圧迫されたランゴバルド人がイタリア半島に侵入した（コラム22）。

イタリア半島に侵入したランゴバルド人は約30万人で、そのうち武装した兵士は4万～5万人であったとの説がある。おそらく、大勢のゲピト人が同行した（約2万人のザクセン人も同行したようである）。イタリア半島に侵入したランゴバルド人はランゴバルド王国を開国したが、ビザンツ皇帝ユスティヌス2世は放置する。そして573年、ナルセスが

ナポリ市近郊で死去する。
　当時のビザンツ帝国は突厥と同盟を結び、サーサーン朝ペルシャを挟撃していた。そしてユスティヌス2世はサーサーン朝ペルシャとの戦争に執着していた。彼の死後、後を継いだティベリウスも同様である。他方、イタリア半島では、ランゴバルド人の有力者が各地で軍閥を形成し、略奪を続けていた。しかしティベリウスの死後、ビザンツ皇帝に即位したティベリウスの娘婿マウリキウス（在位582～602年）がサーサーン朝ペルシャと和睦し、ラヴェンナとカルタゴに総督府を置く。そしてメロヴィング朝フランク王国と同盟を結び、イタリア半島各地のランゴバルド人軍閥を挟撃する。
　584年にランゴバルド王に即位したアウタリが各地の軍閥をまとめ、ビザンツ帝国やメロヴィング朝フランク王国の軍勢と戦い侵攻を阻止する。590年、アウタリが死去し、602年にビザンツ軍の下士官＝百人隊長フォカスがマウリキウスを殺害してビザンツ皇帝に即位した。当時のサーサーン朝ペルシャ王ホスロー2世は、フォカスのマウリキウス殺害を口実にしてビザンツ帝国への侵攻を開始する。

（本書では、アウタリ後のランゴバルド王国やメロヴィング朝フランク王国に言及しない。それらに言及することは、本書の主旨から大きく離れる。だが、アウタリ後のイタリア半島について、多少言及したい。アウタリ後もラヴェンナのビザンツ総督府は残った。そしてラヴェンナとローマ市を結ぶ街道を護持し、避難民がラヴェンナ北東にヴェネツィアを建設する。ラヴェンナとローマ市を結ぶ街道は、ランゴバルド人を南北に分断した。イタリア半島南部のランゴバルド人軍閥はベネヴェント公国やスポレート公国に変貌し、フランク王カール1世がイタリア半島北部のランゴバルド王国を滅ぼした後も残る）

コラム21：　病理学と薬理学

　543年にコンスタンティノープルで蔓延した疫病がペストであったか否かはわからない。重視すべきことは、公衆衛生である。当時のコンスタンティノープルは、古代ローマ以来の公衆浴場が消滅していた。
　歴史家たちは、コンスタンティノープルは井戸のない都市で、公衆浴場が消滅した原因は水不足である、と強調する場合がある。現実に、378年のアドリアノープルの戦いで戦死したウァレンスは、コンスタンティノープルに水を供給する大水道を建設している。
　だが、筆者は、キリスト教の影響が大きいと考える。キリスト教の下で、「裸の付き合い」はよくないという考えが広まり、公衆浴場が消滅したように思う。

　コンスタンティノープルで蔓延した疫病は、アナトリア半島や北レヴァントでも蔓延したが、重視すべきことは、当時のサーサーン朝ペルシャで病理学と薬理学が誕生したことである。おそらく、ジュンディーシャープール学院の学者たちが、病理学と薬理学を発明した。

コラム22：　アヤソフィア（ソフィア大聖堂）

　ユスティニアヌス1世は、猜疑心の強い横暴な皇帝であった。それでも歴史に大きく名を残したのは、ローマ法大全＝ユスティニアヌス法の編纂を命じ、アヤソフィア（ソフィア大聖堂）の建設を命じたからである。アヤソフィアは989年の大地震に耐え、築後1000年以上経過した今も残存している。
　コンクリート建造物の耐用年数は100年といわれているが、石材建造物の耐用年数は1000年以上である。しかもベリサリウス将軍の書記官プロコピウスが書き残した著作「建築について」によれば、アヤソフィアの施工期間は約4年である。石材建造物の工事が、コンクリート建造物の工事より難工事になる場面はおそらくない。筆者は、建築に疎いが、「建築について」は全六巻の大作で、建築の専門家が一読する価値がある、と考える（ちなみに、プロコピウスは「戦史」も書き残している）。

　原発で使用した使用済み核燃料は、再処理や地層処分などするより石材建造物を建設して1000年保管するほうがよい。また、老朽化した原発は、解体して埋設するより石棺化して1000年保管するほうがよい。優秀な技術者は、歴史から技術を学ぶが、使用済み核燃料の再処理や地層処分、老朽原発の解体に固執する経産省や電力資本には優秀な技術者がいないのかもしれない。

３．４　アッバース朝イスラーム帝国の誕生

　ホスロー1世の死後、彼の嫡男ホルミズドがサーサーン朝ペルシャ王ホルミズド4世（在位579～590年）に即位する。即位後、ホルミズド4世は13600人の貴族や神官を処刑した。

（すでに述べたが、ビザンツ帝国もサーサーン朝ペルシャも執政を軍政と民政に分割し、官僚を武官と文官に分離している。さらに国教＝最高法規を制定し、最高法規の下で国教会が版図内を統治した。そして、君主（皇帝あるいは「諸王の王」）が貨幣の鋳造と発行を独占し、貨幣経済＝統治制度を具現する。だが、大きなちがいがひとつある。ビザンツ軍は、古代ローマから続く国軍で、国税＝人頭税を制定したのはディオクレティアヌス帝の代である。だが、サーサーン朝ペルシャが人頭税を制定したのはホスロー1世の父カワード1世の代である。私見であるが、サーサーン朝ペルシャの国軍体制は不備の多い体制であったように思う。ホルミズド4世は大貴族家を排除して国軍体制を再構築した。13600人の粛清はそのためである。とはいえ、有力な大貴族家＝ミフラーン家等が残る。ちなみに、ホルミズド4世は年齢40歳前後で即位した。彼は13600人の貴族や神官を処刑したが、他方、庶民を庇護する）

　国軍体制を再構築したホルミズド4世は、ビザンツ帝国との戦争に没頭するが、戦果は芳しくなかった。他方、東方から突厥が侵入し、北方から後述するハザール人の侵入がはじまる。ホルミズド4世は、ミフラーン家のバフラーム・チョービンを軍司令に任命する。チョービン率いるペルシャ軍は突厥とハザール人を撃退し、その後ビザンツ軍と戦うが、アラス川の戦いで敗北する。
　ホルミズド4世は、チョービンを軍司令から外して討伐軍を送るが、討伐軍は寝返り、チョービンの指揮下に入る。そして首都クテシフォンを目指す。ホルミズド4世は混乱し、彼の嫡子ホスロー2世（在位591～628年）が彼を殺害して即位するが、チョービンは容赦しない。ホスロー2世はビザンツ帝国に逃れた。
　ビザンツ帝国に逃れたホスロー2世は、ビザンツ皇帝マウリキウスの娘マルヤム（マリア）と結婚し、マウリキウスや母方のふたりの叔父の支援を得てクテシフォンを奪還する。そしてバフラーム・チョービンを処刑する。だが、その後ふたりの叔父との関係が悪化し、約7年の内戦が勃発した。内戦を制圧したホスロー2世は、その後ビザンツ帝国との友好を維持し、版図内のキリスト教徒を保護する。だが、602年にフォカスがマウリキウスを殺害してビザンツ皇帝に即位した後、ビザンツ帝国への侵攻を開始する。

（ホスロー2世は、マウリキウスの支援を得る場面で西コーカサス地方やアルメニア地方の大部分をビザンツ帝国に割譲している。ホスロー2世率いるペルシャ軍の侵攻目的は、マウリキウス殺害の報復であったが、それ以上に、割譲した版図の奪還であった。ペルシャ軍は割譲した版図を奪還した。その後、610年にヘラクレイオス1世がフォカスを処刑し、ビザンツ皇帝に即位して使節団を送り和平を申し出たが、ホスロー2世は和平を拒否する）

　版図を奪還したホスロー2世は、首都クテシフォンに帰還し、その後の対ビザンツ戦争を軍司令シャーヒーンとシャフルバラーズに委ねる。シャーヒーンとシャフルバラーズ率いるペルシャ軍は613年にダマスカス、614年にエルサレム、619年にアレクサンドリアを陥落し、レヴァント地方とエジプトを征服する。その後アナトリア高原に転進してコンスタンティノープルを包囲するが、ヘラクレイオス1世率いるビザンツ軍が反撃する。
　経緯は割愛するが、シャーヒーン率いるペルシャ軍がビザンツ軍に敗北する。シャーヒーンは戦死し、ペルシャ軍を支援していたアヴァール人＝柔然の軍勢が撤退した。失望したホスロー2世は副軍指令にシャフルバラーズの殺害とペルシャ軍の撤退を命じる。だが、殺害命令を察知したシャフルバラーズは、ヘラクレイオス1世に合流し、ホスロー2世に敵対する。
　627年、ラーザード率いるペルシャ軍がニネヴェの戦いで敗北し、ヘラクレイオス1世率いるビザンツ軍がクテシフォンに侵攻する。ホスロー2世の息子カワード2世が父を殺害し、ヘラクレイオス1世と講和した。だが、カワード2世は約半年後に病死する。シャフルバラーズが「諸王の王」に即位するが、式典の最中にファールフ・ホルミズドが彼を殺害し、その後バフラーム・チョービンの孫がホルミズドを殺害する。
　その後、ホルミズドの息子ファーロフザード下の陣営＝パフラヴ派とカワード2世の代に宰相に就任したペーローズ・ホスロー下の陣営＝ペルシグ派の内戦が勃発した。ホスロー2世の孫ヤズデギルド3世（在位632～651年）が即位し、内戦は終結したが、その後イスラーム軍がメソポタミアに侵攻する。
　636年、カーディシーヤの戦いでファーロフザードが戦死し、642年、ニハーヴァンドの戦いでペーローズ・ホスローが戦死する。そして651年、ヤズデギルド3世が部下に殺害され、サーサーン朝ペルシャが滅亡する。

（ホスロー2世が即位した591年からヤズデギルド3世が死去する651年までの約60年、サーサーン朝ペルシャは内紛と内戦を繰り返しながらビザンツ軍およびイスラーム軍と戦い続けた。ホルミズド4世が多数の神官を殺害したため、国教会＝ゾロアスター教会が統治機能を喪失し、国軍が分裂していたように思う。ヤズデギルド3世の死後、彼

の息子ペーローズ3世と彼の弟バハラーム7世が唐に支援を求め、他方、上で述べたファーロフザードの弟がカスピ海南岸にバーワンド朝を開く。唐の高宗はペルシャ難民を受け入れ、現在のアフガニスタン・イスラーム共和国南西に波斯（ペルシャ）都督府を設ける。そしてペーローズ3世を右武衛将軍に任じた。その後則天武后の皇后擁立に反対して西域に左遷された裴行倹の下で、ペーローズ3世の息子ナルシエフが唐とペルシャの連合軍を率いる。だが、主な戦闘は突厥との戦闘であった。突厥との長期戦、および後述するタラス河畔の戦いでの唐軍の敗北がサーサーン朝の再興を困難にしたように思う。680年、唐とペルシャの連合軍が突厥を大破し、裴行倹は長安に凱旋して682年に死去する。他方、ナルシエフはバクトリア地方でウマイヤ朝アラブ帝国と戦い続けるが、707年に死去する。そして710年、バハラーム7世も死去する。その後バハラーム7世の息子ホスロー6世がウマイヤ朝アラブ帝国と戦い続けたが、サーサーン朝を再興することはできなかった。他方、ファールフザードの弟が開いたバーワンド朝はウマイヤ朝アラブ帝国からの独立を維持し、アッバース朝イスラーム帝国からの独立も維持した。そしてカスピ海南岸にイスラーム教ザイド派が広まる。筆者は、現在のクルド人はバーワンド朝ペルシャ人の末裔であると考える。クルド人の信仰はイスラーム教スンナ派と、異端視されているアレヴィー派、ミトラ教に近いヤジド教であるが、改宗や習合は自由である。2016年、イラク共和国の北部クルディスタン地方スレイマニヤ市でゾロアスター教の拝火殿が建立された。そしてクルド人の改宗あるいは習合がはじまる。ゾロアスター教への改宗や習合は、クルド人がイスラーム国＝ISILの軍勢と戦うための選択でもある。クルド人は国家を持たない民族集団であるが、もしも彼らが国家を建国する場面があるとすれば、国名は「ペルシャ」になるかもしれない。ちなみに、社会学者や哲学者、宗教家は、ふたつの神や信仰の融合を「習合」と呼ぶ場合が多い。だが、民衆がふたつの信仰を持つことから習合がはじまる、と筆者は考える）

本書では、イスラーム教の創始者ムハンマド（570～632年）の生涯、および彼の下で具現したアラビア半島統一に言及しない。ムハンマドの死後、アブー・バクルが初代カリフ（ムハンマドの後継者）に即位するが、634年に病死する。その後ウマル（在位634～644年）が二代カリフに即位し、イスラーム軍の大征服運動がはじまる。

636年、イスラーム軍はヤルムークの戦いでビザンツ軍に大勝した。その後636年のカーディシーヤの戦いと642年のニハーヴァンドの戦いでペルシャ軍に大勝する。他方、ダマスカスとエルサレム、アレクサンドリアを陥落し、レヴァント地方とエジプトを征服する。

644年、ウマルは殺害されるが、ウマイヤ家のウスマーン（在位644～656年）が三代カリフに即位し、サーサーン朝ペルシャの版図を征服する。しかし656年、イスラーム兵の反乱が勃発し、ウスマーンも殺害された。ウスマーン殺害後、ムハマンドの娘婿アリー（在位656～661年）が四代カリフに即位し、ウスマーンを殺害したイスラーム兵たちを赦免する。レヴァント地方の総督ムアーウィヤ1世がアリーに反発した（ムアーウィヤ1世はウスマーンと同じウマイヤ家の同族である）。

アリーとムアーウィヤ1世の内戦が勃発したが、657年のスィッフィーンの戦いで和睦する。だが660年、ムアーウィヤ1世がカリフ即位を宣言したため、反発したアリー下のイスラーム兵たちがハワーリジュ派を結成してアリーから離れる。そしてアリーとムアーウィヤ1世に刺客を送る。ムアーウィヤ1世は難を逃れたが、アリーは刺客に殺害された。その後ムアーウィヤ1世は、自身の死後にアリーの息子ハサンがカリフを継承すると宣言し、ハワーリジュ派を討伐する。しかし669年、ムアーウィヤ1世が死去する前にハサンが死去する。

680年、ムアーウィヤ1世が死去し、彼の嫡男ヤズィード1世がカリフを継承する。ハサンの弟フサインが存命していたが、同680年に勃発したカルバラーの戦いで戦死する。その後683年にヤズィード1世が死去し、ヤズィード1世の嫡男ムアーウィヤ2世がカリフを継承するが、同683年に死去する。そしてアラブ人イスラーム教徒がウマイヤ家の同族を支持するスンナ派とアリー家の同族を支持するシーア派、その他に分裂し、内乱が勃発した。

とはいえ軍事力はレヴァント地方とエジプトを支配するウマイヤ家の同族が圧倒している。ウマイヤ家同族の長老マルワーン1世がカリフを継承し、彼の死後、彼の嫡男アブドゥルマリク（在位685～705年）がカリフを継承する。アブドゥルマリクは内乱を制圧し、大征服運動を再開した。他方、アラビア語を公用語化し、金貨＝ディナール金貨と銀貨＝ディルハム銀貨を鋳造して発行する。

（ムハマンドの死後、初代カリフのアブー・バクルと二代カリフのウマル、三代カリフのウスマーンがイスラーム世界の統治体制を構築した。アブー・バクルは、イスラーム教の下で部族間の対立、および古参者と新参者の対立を調停する。ウマルは、後のシャリーア＝イスラーム法につながる法体系を制定し、アミール（信徒の指揮官）の称号を設けた。そしてウシュル＝10分の1税とハラージュ＝地租やジズヤ＝人頭税を制定し、アミールの下で官吏が徴税する体制を構築する。ウスマーンは、クルアーンを正典化し、他方、戦利品の分配を厳密にして財務体制を構築した。ムアーウィヤ1世もそのひとりであるが、ウスマーンは大勢のウマイヤ家同族にアミールの称号を与えたため、評判は芳しくない。だが、ウマルが構築した文治主義型統治体制を強固にして財務体制を構築するにはそうするしかなかったように思う。それがウマイヤ朝の土台になる。ムアーウィヤ1世後、カリフの継承が合議制から世襲制に移行する。以後、ウマイヤ朝を「ウマイヤ朝アラブ帝国」と呼ぶ。ウマイヤ朝アラブ帝国の首都はダマスカスである）

アブドゥルマリクが再開した大征服運動は、ウマイヤ朝アラブ帝国の版図を北アフリカから中央アジアにまで広げた。とはいえ、重視すべきことは、金貨と銀貨の発行である。歴史家たちは、アブドゥルマリクが鋳造して発行した金

貨＝ディナール金貨と銀貨＝ディルハム銀貨が金銀複本位制のはじまりになったと論じる場合がある。だが、筆者の認識では、それら金貨や銀貨は既存のローマ金貨やペルシャ銀貨を数量補填したにすぎない。

（レヴァント地方とエジプト、サーサーン朝ペルシャの版図を征服したウマイヤ朝アラブ帝国にとって、金銀の採掘は容易である。アブドゥルマリクは金貨と銀貨を鋳造して発行した。しかし、金銀比価は従来の慣習に委ねたように思う。筆者は、金銀複本位制を発明したのはアッバース朝イスラーム帝国である、と考える。アッバース朝イスラーム帝国の金貨と銀貨の交換比は12．5で、重量を基準にした金銀比価は15．0である。制定した時期はおそらく770年頃で、当時のアッバース朝カリフはマンスールである。ちなみに、アブドゥルマリクは官吏の俸給を銀貨で支払った。歴史家たちは、官吏の俸給を銀貨＝財貨で支払った最初の君主はアブドゥルマリクである、と論じる場合がある）

ところで、アブドゥルマリクはキリスト教を嫌ったが、キリスト教徒を弾圧する場面はなかった。ウマルの代から、異教徒であってもハラージュ＝地租やジズヤ＝人頭税を納税すれば庇護民になり、生命や財産が保障されていた。版図内での庇護民弾圧は、税収不足の原因になるだけでなく、ウマルが構築してウスマーンが強固にした体制への反逆でもある（ちなみに、アラブ人イスラーム教徒の納税はウシュル＝10分の1税だけである）。

だが、版図外、すなわちビザンツ帝国や西ヨーロッパ諸国のキリスト教徒は庇護民ではない。ムアーウィヤ1世の代に、ウクバがカイラワーン市（現在のチュニジア共和国ケルアン市）を拠点化して礼拝堂を建立し、その後ムーサーが北アフリカ全域を征服する。北アフリカの現地人＝ベルベル人がイスラーム教に改宗し、エーゲ海諸島やイタリア半島沿岸を襲いはじめた。そして、アブドゥルマリクの死後、カリフを継承した彼の長男ワリード1世（在位705～715年）の代にムーサー配下のベルベル人ターリク率いるイスラーム軍がグアダレーテ河畔の戦い（711年）で西ゴート軍に大勝し、イベリア半島を征服する。

（ターリクは720年頃にダマスカスで死去する。その後イベリア半島を征服したイスラーム軍はピレネー山脈を越えてフランク王国に侵攻したが、732年のトゥール・ポワティエ間の戦いでカール・マルテル率いるフランク軍に大敗する）

ワリード1世は、息子のカリフ継承を望んでいた。各地の総督＝アミールたちも協力的であったが、息子がカリフを継承する前にワリード1世が死去する。ワリード1世の死後、彼の弟スライマーン（在位715～717年）がカリフを継承した。そして彼に反発する総督＝アミールの地位を剥奪しはじめる。

ホラーサーン地方の総督クタイバが反旗を翻した。スライマーンは、クタイバ下のアラブ兵に多額の褒賞を与えると約束し、帰還を命じる。反乱は失敗し、クタイバは処刑された。だが、クタイバ処刑後、ホラーサーン地方および中央アジアの統治が崩壊する。しかし、スライマーンはイスラーム軍にビザンツ帝国への侵攻を命じた。イスラーム軍はコンスタンティノープルを包囲したが、コンスタンティノープルは陥落しない。その後スライマーンが病死し、ウマル2世（在位717～720年）がカリフを継承する。

ウマル2世はイスラーム教徒の納税＝10分の1税を廃止し、他方、サダカ＝喜捨を義務化した（これが今も続くザカート＝救貧税のはじまりである）。そしてジズヤ＝人頭税も廃止したが、彼の死後、カリフを継承したヤズィード2世（在位720～724年）が人頭税を復活する。そのため北アフリカでベルベル人の反乱が勃発した。724年にヤズィード2世が死去し、カリフを継承したヒシャーム（在位724～743年）がベルベル人の反乱を鎮圧する。その後メソポタミアでもザイドが小規模な反乱を主導したが、ウマイヤ朝は政体を維持した。

（ウマイヤ朝は、アラブ人イスラーム教徒からハラージュ＝地租とジズヤ＝人頭税を免除し、異教徒に課税した。だが、異教徒だけでなくイスラーム教に改宗したメソポタミアやホラーサーン地方のペルシャ人、北アフリカのベルベル人からも地租と人頭税を徴税した。ウマイヤ朝がアラブ人以外のイスラーム教徒から地租と人頭税を徴税した理由は、おそらく習合である。民衆は、聖職者ではない。民衆は、ふたつの信仰を持つことに苦痛を感じない。民衆にとって、改宗は支配者層の搾取や弾圧を回避する現実的選択である。筆者の憶測であるが、ゾロアスター教を棄教することなくイスラーム教に改宗したペルシャ人が大勢いた。同じことが、ベルベル人についてもいえる。おそらく、ウマイヤ朝はイスラーム教に改宗したペルシャ人やベルベル人は偽イスラーム教徒である、と認識していた。だが、彼らは準イスラーム教徒でもある。準イスラーム教徒＝マワーリーたちは、人頭税の復活を容認しない。人頭税の復活が、「アッバース革命」の原因になる）

ヒシャームの死後、短命のカリフが続き、744年に60歳のアルメニア総督マルワーン2世（在位744～750年）がカリフを継承する。マルワーン2世即位後、レヴァント地方やエジプト、北アフリカで反乱が勃発した。マルワーン2世は各地の反乱を鎮圧してウマイヤ朝の政体を維持するが、アッバース革命が勃発する。

747年、アブー・ムスリムが挙兵してホラーサーン地方を制圧し、メソポタミアに進軍する。アブー・ムスリム率いるホラーサーン兵団がメソポタミア各地を制圧したが、ウマイヤ朝はアブー・ムスリムの恩人アッバース家の家長イブラーヒームを捕えて処刑した。イブラーヒームを失ったアブー・ムスリムは、イブラーヒームの弟サッファーフ（在位750～754年）をカリフに推戴する（以後、アッバース家が支配する版図を「アッバース朝イスラーム帝国」と呼ぶ）。

750年、サッファーフの叔父アブドゥッラー率いるメソポタミア兵団がマルワーン2世率いるレヴァント兵団に大勝し、ダマスカスを陥落してレヴァント地方を征服する。マルワーン2世はエジプトに逃れたが、アブドゥッラーの弟サーリフが彼を捕殺した。その後アブドゥッラーがレヴァント地方、アブー・ムスリムがホラーサーン地方を統治する。そして751年、タラス河畔の戦いでズィヤード率いるホラーサーン兵団が高仙芝率いる唐軍に大勝する（コラム23）。

（タラス河畔の戦い後、唐のタリム盆地以西支配が困難になり、ホスロー6世はサーサーン朝再興を断念した。そして中央アジアにイスラーム教が広まるが、サッファーフが行った税制改革を軽視できない。すでに述べたが、ウマイヤ朝は非アラブ人イスラーム教徒からもハラージュ＝地租とジズヤ＝人頭税を徴税した。だが、サッファーフは非アラブ人イスラーム教徒の人頭税を廃止する。他方、アラブ人イスラーム教徒からも地租を徴税する。すなわち、サッファーフはすべてのイスラーム教徒の納税を平等にした。アッバース家のカリフ簒奪を「革命」と呼ぶのは、サッファーフがすべてのイスラーム教徒の納税を平等にしたからである。ちなみに、中世イスラーム社会の地租と現代の固定資産税は異質である。ウマイヤ朝アラブ帝国では、総督＝アミールが赴任した地域でハラージュ＝地租を徴税した。アッバース朝イスラーム帝国は、官吏が出向して徴税し、カリフの元に送ったが、官吏が検地等を行う場面はない。私見であるが、中世イスラーム社会の地租は「農税」である。ところで、アッバース革命の成功はウマイヤ家に反発するシーア派イスラーム教徒に負う部分が大きいが、カリフ即位後、サッファーフはシーア派を弾圧する。サッファーフの死後、カリフを継承したマンスールもシーア派を弾圧した。サッファーフとマンスールのシーア派弾圧を非難する歴史家は多い。だが、アリー家のカリフ継承を支持する当時のシーア派は、アッバース家の平等主義に反発している。サッファーフとマンスールのシーア派弾圧は、地租＝農税の徴税に反発するアラブ人イスラーム教徒への弾圧でもあったように思う）

サッファーフの死後、サッファーフの異母兄マンスール（在位754～775年）がカリフを継承するが、アブドゥッラーが反発した。アブドゥッラーは自身のカリフ継承を要求する。だが754年、ニシビスの戦いでレヴァント兵団がホラーサーン兵団に大敗する。アブドゥッラーは捕えられて獄死した。アブドゥッラーの弟サーリフがマンスールに忠誠を誓い、レヴァント地方を統治してビザンツ帝国の侵攻等に対処する。他方、マンスールはアブー・ムスリムを殺害してホラーサーン兵に多額の報酬を支払い、「アッバース軍」を編成する。

アブー・ムスリム殺害後、マンスールはワズィール＝宰相とディーワーン＝官庁を設け、徴税体制を強固にして財政を確立する。そしてサーサーン朝ペルシャの首都クテシフォン付近に新都バグダードを建設し、バリード＝駅逓を整備して中央集権体制を構築した。とはいえ、ホラーサーン地方と北アフリカで反乱が勃発した。アッバース軍はホラーサーン地方の反乱を鎮圧したが、北アフリカの反乱を鎮圧できなかった。北アフリカでは、イブン・ルスタムがターハルト市（現在のチュニジア共和国ティアレット市近郊）でルスタム朝を開く（コラム24）。

（サッファーフは、アブドゥッラーのカリフ継承を約束していた。しかしウマイヤ家に忠誠を誓っていたレヴァント兵たちは、アブドゥッラーの命令に従わなかったように思う。ニシビスの戦いでのアブドゥッラーの敗北は必然であった。ちなみに、マンスールの母親はベルベル人の女奴隷である。平等主義の下で、マンスールがカリフを継承した。マンスールの死後、彼の嫡男マフディーがカリフを継承するが、マフディーの死後カリフを継承したハーディーもハールーン・ラシードも母親はイエメン人の女奴隷である）

マンスールの死後、カリフを継承したマフディー（在位775～785年）は再度勃発したホラーサーン地方の反乱＝ムカンナアの乱に忙殺された。ムカンナアの乱の首謀者はハーシムという名の人物で、アブー・ムスリムの死を否定して仮面＝ムカンナアを被り、イスラーム教とゾロアスター教を習合してアッバース朝に反旗を翻した。ムカンナアの乱はマフディーがカリフを継承した翌年＝776年に勃発し、マフディーが死去する前年＝784年に終結する。

マフディーの死後、彼の長男ハーディーがカリフを継承するが、786年に死去し、次男ハールーン・ラシード（在位786～809年）が23歳でカリフを継承する。ハールーン・ラシードの代がアッバース朝イスラーム帝国の最盛期である。ハールーン・ラシード率いるアッバース軍はビザンツ帝国と三度戦い、三度とも勝利している。ペルシャ人のヤフヤーが宰相に就任し、ヤフヤーが束ねるバルマク家がハールーン・ラシードの治世を支えた。他方、ウラマー＝知識人が台頭する。ザカート＝救貧税が知識人たちの活動を支えた（コラム25）。

年齢が40歳を超えた頃、ハールーン・ラシードはバルマク家の財産を没収して親政をはじめ、46歳で死去する。ハールーン・ラシードがバルマク家の財産を没収した時期は、ウラマーたちの活動が活発化した時期でもある。ハールーン・ラシードは、宰相の代わりはいくらでもいる、と思ったのかもしれない。

コラム23： 後ウマイヤ朝

アブドゥッラーは、ウマイヤ家を根絶やしにしようとしたが、ウマイヤ家のひとりアブド・アラフマーン1世が北アフリカに逃れてイベリア半島に渡り、後ウマイヤ朝を開く。そしてアミール即位を宣言した（カリフ即位を宣言しないでアミール即位を宣言したのは、アッバース家のカリフ即位を認めたからではない。彼は自身以外のウマイヤ家の誰かがカリフに即位する場面を考慮して、アミール即位を宣言した）。

アブド・アラフマーン1世のアミール即位後、アッバース朝カリフ・マンスールの支援を得たイベリア半島のアッバース勢が反乱を起こすが失敗する。その後アッバース勢はフランク王国に支援を求め、フランク王カール1世率いるフランク軍がイベリア半島に侵攻する。アッバース勢であったサラゴサ総督フサインがウマイヤ家に寝返ったため、フランク軍はサラゴサを包囲した。しかしフサインが多額の金貨を支払い、フランク軍は撤退する。帰路の途中、フランク軍はパンプローナを襲いバスク人の住居を破壊した。住居を失ったバスク人はフランク軍に夜襲を仕掛け、輜重を略奪する。フランク軍はバスク人に敗退した。

このフランク軍のイベリア半島侵攻と敗退は、後に「ローランの歌」の題材になるが、アブド・アラフマーン1世は危機を脱したといえる。後ウマイヤ朝はサラゴサを支配した。アブド・アラフマーン1世の死後、後ウマイヤ朝は発展し、929年、アブド・アラフマーン3世がカリフ即位を宣言する。後ウマイヤ朝の首都はコルドバである。

コラム24： ルスタム朝とアグラブ朝

758～761年の間、イブン・ルスタムがハワーリジュ派から派生したイバード派を束ね、北アフリカのカイラワーン市を支配する。アッバース軍がカイラワーンを奪取するが、イブン・ルスタムはターハルトでイバード派のイマーム＝指導者に推戴され、ルスタム朝を開いた。

他方、カイラワーンではイブラーヒーム1世がハールーン・ラシードに4万ディナールに金貨を送り、総督の地位を得る。そしてアミールを称し、アグラブ朝を開いた。

ルスタム朝とアグラブ朝は対立しながら発展したが、895年に戦争が勃発する。戦争に敗北したルスタム朝は疲弊した。909年、ファーティマ朝がルスタム朝を滅ぼす。その後ファーティマ朝はアグラブ朝も滅ぼす。

ほぼ同時期（827年頃）に、イスラーム教徒がクレタ島とシチリア島に侵入した。アモリア朝ビザンツ皇帝ミカエル2世がビザンツ軍を送り対処したが、国内で大規模な反乱（スラブ人トマスの反乱）が勃発した直後であったため、兵員が不足していたように思う。ビザンツ軍は大敗し、イスラーム教徒がクレタ島とシチリア島を支配する。

クレタ島に侵入したイスラーム教徒とシチリア島に侵入したイスラーム教徒は出自が異なる。クレタ島に侵入したイスラーム教徒は、後ウマイヤ朝に反旗を翻した反乱分子で、エジプトに逃亡し、その後クレタ島に侵入した。シチリア島に侵入したイスラーム教徒はアグラブ朝が遠征したアグラブ軍である。

とはいえ、重視すべきことはその後のクレタ島とシチリア島のちがいである。次章で、10～11世紀頃（マケドニア朝ビザンツ帝国の頃）のクレタ島とシチリア島について言及するが、アッバース朝期に、イスラーム教徒の海賊船団がアドリア海沿岸やエーゲ海沿岸、他の東地中海諸島を荒らし回った。

コラム25： イドリース朝

ハールーン・ラシードがカリフを継承した場面で、マッカ近郊でシーア派の反乱が勃発した。アッバース朝は反乱を鎮圧したが、反乱軍に参加したイドリース1世が北アフリカに逃れ、イドリース朝を開く。イドリース朝の首都は現在のモロッコ王国フェズ市である。イドリース朝は次のイドリース2世（791～828年）の代に最盛期を迎えるが、彼の死後、衰退する。その後ファーティマ朝の支配下に入り、985年に滅亡する。

３．５　カロリング朝フランク王国

クロヴィスの死後、メロヴィング朝フランク王国は分裂し、各国の宮宰（国王の代理人）が形骸化した王国体制を維持する。６８０年、ピピン2世が分裂した王国のひとつ＝アウストラシアの宮宰に就任した。そして６８７年のテルトリーの戦い後、他国（ネウストリアやブルグント）の宮宰も兼ねる。

ピピン2世の死後、カール・マルテルが彼の後を継ぐ。７３２年、イベリア半島を征服したイスラーム軍がピレネー山脈を越えてブルグンド（ブルゴーニュ）地方に侵攻したが、トゥール・ポワティエ間の戦いでフランク軍に大敗する。

７４１年、宮宰カール・マルテルが死去し、後を継いだ彼の長男カールマンの支持を得てキルデリク3世がフランク王に即位した。だが７４７年、カールマンは突如モンテ・カッシーノ修道院に隠遁する。そして７５１年、カール・マルテルの次男ピピン3世がキルデリク3世を幽閉して国王に即位し、フランク王国の王統がメロヴィング朝からカロリング朝に変遷する。即位後、ピピン3世（在位７５１～７６８年）率いるフランク軍がランゴバルド王国に侵攻し、西ローマ帝国の古都ラヴェンナを奪還してローマ教会に寄進する。ローマ教会はピピン3世のフランク王位を承認した。

（ピピン3世の寄進が教皇領のはじまりで、ローマ教会とローマ教皇庁の歴史のはじまりでもある。以後、ローマ教会を「カトリック教会」と呼び、ローマ教会総主教を「ローマ教皇」と呼ぶ）

ピピン3世の死後、彼の長男カール１世（在位７６８～８１４年）がフランク王に即位する。トゥール・ポワティエの戦い後、カール・マルテルはキリスト教会が保有する土地を還俗して臣下に分配し、彼らの財力を高めて重装騎士団を編成した。ピピン3世も父の政策を継承した。祖父と父から重装騎士団を相続したカール１世は即位直後から外征をはじめる。

７７３年、カール１世はローマ教皇ハドリアヌス１世の要請を得てランゴバルド王国に侵攻する。そして７７４年、ランゴバルド王国の首都パヴィアを占領してイタリア半島北部と中部を征服し、中世イタリア王国＝カロリング朝イタリア王国を開国する。その後、カール１世はイタリア半島中部（ローマとラヴェンナと結ぶ回廊）をローマ教皇庁に寄進した。

イタリア半島中部を寄進した後、カール１世はライン川を超えてザクセン地方（ライン川東岸からエルベ川西岸までの地域）に侵攻し、その後ブルターニュ地方とアキテーヌ地方を支配する。そしてピレネー山脈を越えて後ウマイヤ朝の征服を試みるが、コラム２３で述べたように、イベリア半島で大敗する。

だが、ライン川以東のザクセン地方を概ね征服したカール１世は、ドナウ川以南のバイエルン地方を威圧征服する。その後外征先をアヴァール人が住むドナウ川以北のパンノニア地方に向けた。７９６年、カール１世率いるフランク軍はアヴァール人の居住地域を破壊しつくし、莫大な富財を略奪する。

（アヴァール人＝柔然の抵抗は微弱で、彼らは逃亡した。突厥の脅威から解放されたアヴァール人は、約２００年の平和期間に軍事力を喪失していたのかもしれない。逃亡したアヴァール人はマジャール人に同化したように思う）

８００年、ランゴバルド王国を滅ぼし中世イタリア王国を開国したカール１世はローマで戴冠する。当時のビザンツ皇帝は女帝エイレーネーであるが、カトリック教会は「女性のローマ皇帝」を認めない。したがって、カール１世の戴冠は、「西ローマ皇帝」即位を意味していた。だが８０２年、ニケフォロス１世がビザンツ帝国の帝位を簒奪し、カール１世の即位を否定する。８０９年、カール１世の次男ピピン率いるフランク軍がヴェネツィアに侵攻するが、陸上で無敵であったフランク軍は海上で無力であった。

８１１年、ブルガリア王国との戦争（プリスカの戦い）でニケフォロス１世が戦死し、新たに即位したビザンツ皇帝ミカエル１世との間で和議が成立する。とはいえ、ミカエル１世はカール１世のフランク皇帝即位を認めたが、西ローマ皇帝即位までは認めない。フランク王国とビザンツ帝国の大戦は不可避であるように見えたが、カール１世が妥協する（コラム２６）。

（すでに述べたが、ランゴバルド人が侵入した場面でイタリア半島北東に逃れたローマ人がヴェネツィアを建設した。ビザンツ帝国は、ヴェネツィアの首長にドゥクス＝属州執政官の地位を与える。その後ドゥクスはドージェ＝元首と呼ばれるようになり、ジェノヴァやピサでもドージェが誕生する。重視すべきことは、フランク軍がヴェネツィアに侵攻して敗退した場面で、カール１世とニケフォロス１世がヴェネツィアをフランク王国にもビザンツ帝国にも属さない都市国家であると認め合ったことである。歴史家たちは、以後のヴェネツィアを「ヴェネツィア共和国」と呼ぶ場合があるが、ヴェネツィアがドージェを選挙で選出するようになるのは１３世紀である。１３世紀以前のヴェネツィアは、家系が変遷する場面もあったが、ドージェは世襲であった。ちなみに、ヴェネツィア共和国は１８世紀に滅ぶが、それまでの間、ドージェを選挙で選出し続けた）

ところで、メロヴィング朝の歴代フランク王は、地方の有力者に伯位を授け、政体を維持していたが、版図を約3倍に拡大したカール1世は伯位を大盤振る舞いする。カール1世は大勢の臣下に伯位を授け、ブルターニュ地方やアキテーヌ地方、ザクセン地方やバイエルン地方、イタリア半島北部に派遣した。彼らの子孫が後の中世騎士＝貴族になるが、他方、カトリック教会が西ヨーロッパ各地に教会や修道院を建設して布教を行い、10分の1税を徴税する（カトリック教会が布教をはじめるまで、ザクセン地方やバイエルン地方は「異教徒の地」であった）。

とはいえ、筆者が重視したいのは、ピピン3世のフランク王位を承認したローマ教皇ザカリアスが752年に死去した後、カトリック教会がビザンツ帝国との関係を切断し（ザカリアスが死去するまで、カトリック教会は新たに就任する教皇の承認をビザンツ皇帝から得ていた）、814年にカール1世が死去した後、フィレンツェで金貨を鋳造して発行したことである。

（古代ローマ期に、キリスト教会が金貨を鋳造して発行する場面はない。フィレンツェが金貨の鋳造をはじめるのはランゴバルド王国（あるいは東ゴート王国）の時代であるが、金貨発行者はローマ皇帝＝ビザンツ皇帝である）

フランク皇帝に即位したカール1世が金貨を鋳造して発行することは、できたかもしれない。だが、彼は銀貨の鋳造と発行に邁進した。カール1世の死後、後を継いだルートヴィヒ1世（在位814～840年）が金貨を鋳造して発行する場面もない。そしてルートヴィヒ1世の死後、カロリング朝フランク王国は東フランク王国と西フランク王国、中部フランク王国に三分裂する。

（カール1世の銀貨鋳造と発行を「幣制改革」などと呼びながら、カトリック教会の金貨鋳造と発行に言及しない歴史家や社会学者が大勢いる。彼らは、ピピン3世の寄進を得たローマ教皇ステファヌス3世が発行した「コンスタンティヌスの寄進状」、およびカール1世の死後カトリック教会が発行した「イシドールス法令集」を偽書と呼び、歴史を解説する。だが、それら「偽書」は、カトリック教会が新約聖書の教えに反して領地を保有し、金貨を鋳造して発行することを正当化するためのものである。しかし、歴史家や社会学者たちはそのような指摘をしない。困ったことに、政治学者や経済学者にも同様な人物が大勢いる。財貨を鋳造して発行する者が最初に財貨を使用する。この権限は絶大で、支配者の「力」の源泉でもあるが、にもかかわらず、歴史家や社会学者、政治学者や経済学者たちはローマ教皇を「権威」と呼び、統治権者として論じない。ちなみに、カトリック教会の金貨発行とアッバース朝イスラーム帝国が制定した金銀複本位制に同時代性がある。金銀複本位制は西ヨーロッパにも波及した）

ユーラシア大陸西部では、8世紀後半から奴隷の獲得も戦争目的のひとつになる。征服者たちは被征服者＝奴隷を銀貨＝銀と交換した。

8世紀後半、奴隷をもっとも多く輸出したのはフランク王国である。カール1世下のフランク軍がオーデル川を越えてバルト海沿岸に侵攻する場面はなかったが、エルベ川を超える場面があった。当時、ユトランド半島やスカンジナビア半島で暮すノルマン人たちはキリスト教に改宗していない。フランク軍は彼らを捕縛して「輸出」した。

奴隷の大口買い手はアッバース朝イスラーム帝国である。バグダード建設後、さらなる巨大都市サーマッラーの建設、イラン高原やホラーサーン地方の灌漑等に着手していたアッバース朝イスラーム帝国は土木事業で使役する奴隷を無際限に必要としていた。

（コラム24で、イスラーム教徒がクレタ島とシチリア島を支配したと述べたが、その後クレタ島は奴隷貿易の中継拠点になる。ヴェネツィア商人がヨーロッパ各地で奴隷を買い取り、クレタ島に輸出した。そしてイスラーム商人がクレタ島からエジプトやレヴァント地方に輸出した。カール1世の次男ピピンのヴェネツィア侵攻は、奴隷貿易の権益と無関係であったとは思えない）

アイダー川以北のユトランド半島で暮すノルマン人＝デーン人（デンマーク人）にとって、奴隷の輸出で銀を稼ぐフランク王国は脅威である。他方、アッバース朝イスラーム帝国にとって、奴隷の売り手がフランク王国でなければならない理由はない。異教徒がキリスト教徒を捕縛して売ることもできる。

810年、デンマーク王ゴズフレズが200隻の軍船で北海沿岸のフリースラント（現在のドイツとオランダの国境付近）を襲撃した。だが、フランク王国に海軍はない。フランク軍がノルマン人に反撃する場面はなかった。その後960年にデンマーク王ハーラル1世がキリスト教に改宗するまでの約150年、西ヨーロッパで「奴隷にするか奴隷にされるか」の時代＝ヴァイキング時代が続く。

分裂したフランク王国、および部族集団が乱立していた当時のアイルランドやイングランドがノルマン人の餌食になるのは必然であった。ノルマン人たちは東フランク王国を襲撃し、北海を迂回してアイルランドを支配し、イングランドに侵攻した。そしてウェセックスを除くイングランドのほぼ全域を支配し、その後西フランク王国に侵攻する。885年、ノルマン人たちはパリを襲撃し、さらに南下してサンスも襲撃した。そして912年、ノルマン人の族長ロロ（フランス名ロベール）が英仏海峡沿いの西フランク王国北西部（北フランス）にノルマンディー公国を建国する。

コラム26： イコノクラスム＝聖像破壊運動とテマ制＝軍管区制、物品貨幣の消滅

636年のヤルムークの戦いでイスラーム軍に大敗したヘラクレイオス朝ビザンツ帝国は、レヴァント地方とエジプトを失い、その後北アフリカも失う。他方、ブルガール人がドナウ川を越えてブルガリア王国を建国する。ビザンツ帝国は、公用語をラテン語からギリシャ語に変更し、「中世ギリシャ帝国」に変貌して北の国境線をドナウ川からバルカン山脈に大きく後退させた。

ギリシャ化して版図を大きく縮小したビザンツ帝国は、内乱や外敵との争いに苦悩するが、ここではイコノクラスム＝聖像破壊運動とテマ制＝軍管区制、物品貨幣消滅を下敷きにして、ヘラクレイオス朝期（661～711年）とイサウリア朝期（717～802年）、ニケフォロス朝期（802～813年）とアモリア朝期（820～867年）のビザンツ帝国に言及する。

イコノクラスム＝聖像破壊運動は、イサウリア朝初代皇帝レオン3世（在位717～741年）が726年にイコン＝聖像等の崇拝を禁止する勅令を発令した場面からはじまる。レオン3世の後を継いだコンスタンティノス5世（在位741～775年）もイコノクラスムを継続した。

イコノクラスムに反発したカトリック教会は、ビザンツ皇帝の承諾を得ることなくピピン3世のフランク王即位を承認する。ビザンツ帝国内の教会や修道院もイコノクラスムに反発するが、とはいえ民衆の反乱が勃発していない。

レオン3世は、ウマイヤ朝アラブ軍のコンスタンティノープル包囲を阻止し、740年のアクロイノンの戦いでウマイヤ朝アラブ軍を撃退した。その後ローマ法大全＝ユスティニアヌス法の要約版を編纂して発行し、統治機構を簡素化する。コンスタンティノス5世は、ランゴバルド王国にラヴェンナを占領される場面もあったが（その後フランク王ピピン3世が奪還してカトリック教会に寄進している）、レヴァント地方やメソポタミアでウマイヤ朝アラブ軍に大勝し、小アジアの版図を拡大した。他方、ブルガリア王国への遠征を繰り返し、バルカン山脈以南の防衛を固める。

レオン3世もコンスタンティノス5世も名君であった。彼らが、「キリスト教は偶像崇拝を認めていない」などという理由でイコノクラスムを推進したとは考えにくい。当時のビザンツ帝国は、修道院がイコンを製造販売し、多額の収益を得ていた。また、版図内の農地の3分の1を所有して荘園化していた。筆者は、イコノクラスムの目的は、修道院の収益を断ち、修道院が所有する荘園を皇領化することにあったと考える（したがって、イコノクラスムは支配者層内の争いであり、民衆は無縁である）。

イコノクラスムは、女帝エイレーネーが787年に開催した第二回ニカイア公会議で「異端」になるが、レオン3世とコンスタンティノス5世は、修道院が所有する荘園を皇領化した場面で目的を達成したように思う。筆者の憶測であるが、イコノクラスムとテマ制は無関係ではない。エイレーネーから帝位を簒奪したニケフォロス朝初代皇帝ニケフォロス1世は、軍管区を増やしてテマ制を拡大した。だが、彼がイコノクラスムを復活する場面はない。アモリア朝期に、イコノクラスムが一時復活する場面があったが、歴史的な「事件」になる場面はなかった。

テマ制は、皇帝が定める軍管区内の農地を兵士に与え、兵士が自由農民として農耕に従事しながら有事の場面で軍に所属して戦う、という制度である。テマ制は、ヘラクレイオス朝期に各地で軍管区が生じ、皇帝がそれら軍管区を追認して生じた「制度」であるが、レオン3世とコンスタンティノス5世は皇領化した修道院の荘園を軍管区化し、兵士に分配した。そしてニケフォロス1世が政策的に軍管区を増やし、テマ制を拡大した。

テマ＝軍管区が、反乱の温床になる場面があった。とはいえ、軍管区の兵団が反乱を起こしてコンスタンティノープルに向かう場面があっても、アッバース朝イスラーム帝国のように独立して王朝を開く場面がない。ビザンツ帝国の政治体制が、地域の独立や帝国の分裂を抑止していた。

歴史家たちは、ビザンツ帝国が版図全体の徴税体制を構築していたことを重視する。だが、重視すべきことがその先にある。ビザンツ帝国は、イサウリア朝期（おそらくレオン3世かコンスタンティノス5世の代）に徴税を金納化した。そしてアモリア朝期に、小作農や奴隷からも人頭税を徴税する。すなわち、ビザンツ帝国は民衆のほぼ全員が納税する帝国になる。そして、物品貨幣が消滅した。物品貨幣が消滅した状況下で地域が独立するには、独自の金貨や銀貨を鋳造して発行しなければならない。独立は困難である。

徴税形態と貨幣形態の変遷に同時代性があり、歴史家たちはあまり重視しないが、物品貨幣の消滅は歴史上の大事件である。筆者の考えでは、物品貨幣の消滅は経済空間に位相構造＝商品経済が生じる必要条件で、世界通貨の形成が十分条件である。しかし、アモリア朝期のビザンツ帝国は、商品経済が生じる十分条件がまだ整っていない。ビザンツ帝国で富財が商品化し、それら商品が世界通貨＝銀（秤量貨幣化した銀貨）の下で商品連鎖を形成するのはコムネノス朝期である。

３．６　魏普南北朝時代と隋唐時代の中国

人類が遊動生活をしていた頃の大地は無限（可能無限）であった。しかし新バビロニアがメソポタミアを支配した頃から有限な「土地」になる。他方、銀貨が誕生した。とはいえ、第二ペルシャ帝国＝アルサケス朝ペルシャ帝国の頃まで、銀貨は物品貨幣（穀物や家畜）と等価な「貨幣」ではない。銀貨の用途は限定的で、土地売買や奴隷売買も限定的であった。

4世紀後半以降、財貨（金貨や銀貨）と物品貨幣（穀物や家畜）が貨幣クラスを形成し、貨幣経済の下で土地売買や奴隷売買に関与する人々が増大する。そして荘園が誕生した。当初、荘園は貴族や聖職者の保養地あるいは別荘地であったが、やがて彼らの農地になる。そして農耕に従事する人々（小作農民や奴隷）が増大する。すなわち、土地と奴隷が「財」になる。

4世紀後半以降、荘園が誕生して奴隷人口が増大するが、問題は土地の売り手や買い手がどのようにして奴隷を獲得したかである。中世帝国化した東ローマ＝ビザンツ帝国やペルシャでは、奴隷のルーツは概ね戦争の敗残兵や難民、棄民である。しかし、同時代の中国は「人間狩り」を行った。

前章でも述べたが、304年に永嘉の乱が勃発し、三国時代の中国を統一した西普が滅ぶ。だが、皇族のひとり（司馬睿）が江南に逃れ、建康（現在の南京市）で東普を開国する。347年、皇族の桓温が益州（現在の四川省）を征服し、東普の版図を三国時代の呉と蜀を合わせた領域に広げた。

383年、華北を統一した前秦の皇帝符堅が大軍を率いて南下したが、謝玄率いる東普軍が撃破する。だが、その後内乱が勃発し、劉裕が東普を滅ぼす。そして420年に宋を開国した。劉裕の死後、文帝（劉裕の三男。在位424～453年）が即位する。文帝の代の宋は「元嘉の治」と呼ばれ、江南の地は繁栄した。そして貨幣経済がはじまる。

文帝は多量の銅貨を鋳造して発行したが、それでも銅貨の数量に不足が生じた。歴史家や社会科学者たちは、貴族階級が華奢を好み、商いが活発に行われたためである、と論じている。しかし荘園数が増大している。隋唐時代ほどの規模ではなかったにせよ、ひとりの貴族がひとつ以上の荘園を保有している。そして、西普滅亡後に華北から移住した人々＝漢人が江南の先住民を「討伐」していた。漢人たちは討伐＝人間狩りを行い、先住民に労働を強制して造園や農耕を営んだ。銅貨の数量不足の原因は、土地売買と奴隷売買である。

宋は479年に滅ぶ。その後江南の地で斉、梁、陳という王朝が続く。斉（479～502年）は短命王朝であった。梁は、概ね初代皇帝武帝が約50年在位した王朝である。晩年の武帝は仏教に心酔し、捨身と還俗を繰り替えしたことで有名であるが、治世前半の国政は安定していた。

注視すべきことは、鉄銭を鋳造して発行したことである。歴史家たちは、銅の不足が生じたため、銅貨の代替貨幣として鉄銭を鋳造して発行したと論じている。だが、鉄の融点は銅より高い。しかも人類が冶金で石炭を使いはじめるのは唐の末期である。当時の鉄は貴重な金属であった。仏教に心酔した梁の武帝が、鉄製の武具をなくそうとして鉄銭を鋳造し発行したのかもしれない。その梁は557年に滅び、陳（557～589年）が江南の地を支配する。だが、隋が南北を統一するまで続いた短命王朝であった（コラム27）。

他方、439年に北魏が華北と華中を統一する。北魏は孝文帝（在位467～499年）の代に均田制と三長制を実施し、洛陽に遷都した。洛陽遷都後、北魏にも貨幣経済が浸透し、洛陽は繁栄した。しかし河北（黄河中流域以北）は繁栄と無縁であった。とりわけ北方の柔然と対峙していた有力層に不満が鬱積する。

523年、北魏で六鎮の乱が勃発した。外戚の爾朱栄が平定したが、その後北魏は東魏と西魏に分裂する。しかし東魏も西魏も皇帝は傀儡であった。やがて東魏が高氏の北斉になり、西魏が宇文氏の北周になる。そして577年、北周の武帝（在位560～578年）が北斉を滅ぼし華北と華中を統一する。

北周は、サーサーン朝ペルシャに類似する中世帝国であった。北周は北魏の府兵制を継承したが、三長制を周礼に改めている。周礼（「しゅうらい」と読む）は、儒教が賞賛する古代周の「法」である。むろん古代周が周礼をそのまま実施したか否かは不明であるが、北周はそのまま実施した。重要なことは、周礼は官僚制度であり統治制度でもあった、ということである。

（北周の財貨は絹である。当時、江南で絹の生産は行われていない。行われていたとしても、わずかであったと思う。江南で絹の生産が本格化するのは南宋期である。当時の中国の人々は麻服を着服していた。したがって絹が財貨になる。南朝の銅と北朝の絹の交換関係の下で、ユーラシア大陸東部の経済空間にも貨幣経済が誕生した。交換の場面で、儒教や仏教がどのような役割をはたしたかは不明であるが、隋唐時代に寺院が金融を担う）

歴史家や社会学者たちは、北魏の三長制は徴税のために必要な制度であった、と論じている。歴史家たちの認識は正しいが、官僚制度と統治制度は支配対象がちがう。秦漢時代の中国に官僚制度は存在したが、統治制度と呼べるような「制度」は存在しない。呉楚七国の乱（紀元前154年）後の前漢で武帝が発行した銀貨は褒賞で、武帝が

銀貨を与えたのは文官や武官だけである。人頭税を導入する前の古代ローマやアルサケス朝ペルシャも同様である。

官僚を支配するだけでなく、版図内の民衆も支配する制度、すなわち統治制度が存在するか否かも古代帝国と中世帝国のちがいである。国教が中世帝国の最高法規になり、慣習法を統合する。そして財貨が統治制度になる。国教＝最高法規と財貨＝統治制度は表裏一体であるが、北魏は征服王朝であった。したがって、北魏は三長制を実施して統治体制を整えたが、国教を一元しなかった。しかし北周は周礼制を実施して国教の儒教一元を強行する。

北魏の孝文帝は勤勉で、儒教や道教に精通していたが、自身が鮮卑系＝非漢人であることを認め、仏教を保護した。しかし北周の武帝も鮮卑系であったが、「朕は胡人＝非漢人ではない。朕に仏教を敬う気持ちはない。仏教は胡人の教えであり、正しい教えではない」と断言し、廃仏を断行する。むろん利権集団化した寺院を縮小し、還俗を奨励して兵員や農民を確保する必要もあったと思う。しかし、それ以上に、周礼の下で国教を儒教に一元する必要がおそらくあった（すなわち、最高法規を制定して実施する必要があった）。

華北と華中を統一した北周の武帝は江南の地に侵攻して南朝の併合を目指す。578年、北周は淮河以南＝江北を奪取した。だが同年、武帝は死去する。そして581年、北周の幼帝＝静帝を輔弼していた楊堅が帝位を簒奪し、隋を開国する。そして北方の突厥を懐柔し、西方の吐谷渾を破る。その後江南に侵攻して陳を滅ぼし、華北と華中、華南を統一した。

楊堅＝隋の文帝は、北魏以来の均田制と府兵制を継承したが、周礼を律令制に改め仏教を国教化する。すなわち、北周とは逆に国教を仏教に一元した（亜周辺と南朝を併合するのであれば、国教は仏教に一元するほうが現実的である）。

隋の文帝の治世は同時代のビザンツ皇帝ユスティニアヌス1世の治世に似ている。文帝の国教一元を重視する歴史家は少ないが、国教は中世帝国の最高法規で、国教会＝寺院体制は中世帝国の統治機構である。国教と国教会は中世帝国の条件であり、同時代のビザンツ帝国と隋の類似性をつくり出している。

ちなみに、中国で最初に国教を導入したのは北魏である。北魏は仏教を国教化した（南朝が仏教を国教化したのは梁の時代で、北魏より少し遅い）。だが、道教や儒教も「国教」であった。すなわち、北魏は国教を一元していない。したがって三長制のような緩い統治制度を実施するしかなかった。

だが、北周の武帝は廃仏を断行して国教を儒教に一元した。他方、隋の文帝は仏教に一元する。しかし異教が国教を否定し、異端が国教を歪める。ユスティニアヌス1世がアカデメイアを廃校に追い込み、アリウス派キリスト教を弾圧したように、文帝は国子学（儒教の学府。西晋の司馬炎が開校した。唐代に復校して校名が「国士監」になる）を廃校に追い込み、異教や異端（三階教や浄土信仰）を弾圧した。

ユスティニアヌス1世と文帝には共通点が他にもある。どちらも版図の拡大を強行した。そして、彼らの侵攻あるいは侵略が統治機構を「輸出」した。すなわち、国教の思想（見かけはキリスト教であったり仏教であったりする）が亜周辺に伝わり、付随して財貨＝統治制度が亜周辺に波及する。たとえば、日本に仏教が伝来したのは552年であるが、大和朝廷が仏教の国教化を目指したのは隋朝以降＝飛鳥時代（592～710年）である。

（大和朝廷の崇仏政策は輸入した最高法規の強制である。したがって、内乱の原因になった。飛鳥時代最初の内乱は蘇我氏と物部氏の戦いである。その後大化の改新と壬申の乱が勃発した。壬申の乱後、大和朝廷は銅貨＝富本銭を鋳造して発行する。日本書紀に、「今より銅銭を用いよ、銀銭を用いるなかれ」との記述があるが、天武天皇は寺院体制の構築と統治制度＝銅貨の普及を目指したように思う。だが、成功したとは言い難い。奈良時代の日本は表層的に仏教と銅貨を受け入れたにすぎない。律令制も不徹底で、口分田も広がらなかった。しばらくして、日本でも荘園が誕生するが、いくつかの例外を除けば、規模が小さく数も少ない。当時の日本は、民衆の遊動性が高く、小規模な共同体が散在していた。一部の歴史家が、それが統治機構と統治制度を確立できなかった原因である、と論じている。しかし筆者は、仏教を最高法規化して慣習法を統合できなかったことが原因である、と考える。表層的に仏教と銅貨を受け入れた日本は「大地」を残し、10世紀初頭（平安時代後期）になるが、奴隷制＝奴婢制を廃止する。奴婢制廃止後、荘園が急速に拡大し、平安時代後期＝王朝国家時代の約200年で日本の国土の半分以上が荘園になる。そして、朝廷が国体を形成したが、土地の保有を承認するだけの国体である。そのため土地と財貨の交換＝土地売買は困難であった。日本の国体は財貨＝貨幣の発行と無縁な国体になるが、荘園は鎌倉時代も変貌しながら存続した。他方、多量の銅貨＝宋銭が流入して普及する。日本への宋銭流入は元朝の成立と無関係ではないが、支配者が「力」の源泉を保有しない「建武の新政」が失敗するのは当然である。応仁の乱以降、銅貨の信用が喪失し、荘園が衰退する。銅貨の信用喪失は明朝の成立と世界規模で生じた銀の流通と無関係ではないが、荘園が衰退した日本で物品貨幣が再生した。奴婢制廃止、荘園の拡大、宋銭流入、物品貨幣の再生等に言及することは、本書の主旨から大きく離れる。本書は、日本の中世史に入り込まない。ちなみに、日本書紀に記載されている銀銭は、「無文銀銭」と呼ばれる当時の銀貨である。無文銀銭にも刻印はあるが、漢字の刻印ではない。無文銀銭は、おそらく縫合船＝ダウ船に上船して来日したペルシャ人が持ち込んだ銀貨の模造である。ジャンク船が登場するのは南宋期で、隋唐時代の中国は荒波を踏破する船舶を建造していない。余談であるが、筆者には、天智天皇が仏教に帰依したとは思えない）

南北統一後、隋の文帝は高句麗遠征を強行する。だが、隋軍は大敗した。後を継いだ煬帝も高句麗遠征を強行するが大敗する。高句麗遠征前、煬帝は大都市長安や大運河の建設を強行していた。しかも隋は征服王朝帝国で、外来信仰＝仏教を国教化している。統治は不安定で、失政は政体の崩壊に直結する。高句麗遠征失敗後、各地で反乱が勃発した。しかし煬帝は政務を放棄し、江南の地で遊興に浸る。618年、煬帝は臣下に殺害され、版図内に多数の群雄が残った。

唐を開国した李淵は北周の名門出身で、家格は隋を開国した楊堅とほぼ同格である。しかし煬帝が死去した直後の唐は、隋の版図内で割拠する群雄のひとつにすぎなかった。だが、他の群雄が洛陽を中心とする中原の地で覇を争う中で、李淵＝唐の高祖は長安を中心とする関中の地を支配する。そして621年、新銅貨＝開元通宝を鋳造して発行する（開元通宝は、その後約300年、中国の正貨であり続けるが、筆者は、開元通宝の鋳造と発行が唐の兵力を強化したと考える。開元通宝を発案して鋳造と発行を担ったのは、おそらく李淵の長男李建成である）。

他方、高祖の次男李世民が各地の群雄を各個撃破する。626年、李世民は兄の李建成と弟の李元吉を殺害し、李淵の譲位を得て即位する。李世民＝唐の太宗（在位626～649年）は隋が制定した官制＝三省六部制を整えて戸籍を整え、均田制や府兵制、税制＝租庸調を整えて統治体制を構築した。

太宗の治世は「貞観の治」と呼ばれ、太平の時代であった、と伝えられている。だが、版図内外で戦役が多発している。太宗が即位した直後、突厥＝東突厥の大軍が長安付近に侵攻した。しかし引き返す。太宗が莫大な富財を東突厥に与え、和議を成立させたらしい。

東突厥軍が長安付近に侵攻した翌年とその翌年、寒波がモンゴル高原を襲う。モンゴル高原で放牧していた家畜の大半が凍死し、多数の餓死者が出た。そして東突厥支配下の鉄勒（モンゴル系部族）が離反する。629年、唐軍と鉄勒軍が東突厥軍を挟撃し、東突厥は唐に服従する。その後唐軍が高昌国を滅ぼし、タリム盆地全域（概ね現在の新疆ウイグル自治区）を支配する。そして644年、太宗も高句麗遠征を強行する。しかし唐軍は大敗した。

隋の文帝と煬帝、唐の太宗も高句麗遠征を強行して多大な損失を出した。秦漢時代の高句麗は、中華帝国の版図であった。歴史家たちは、それが隋の文帝と煬帝、唐の太宗が高句麗遠征を強行した理由である、と論じている。だが筆者は、高句麗遠征の目的は銅の獲得であったと考える。前章で「アレクサンドロス3世の東征目的は銀の獲得だったかもしれない」と述べたが、それと似ている。

古代中国文明は黄河文明と長江文明、遼河文明に大別できる。三つの古代文明は高度な青銅器文化を生み出すが、黄河文明についていえば、青銅器を製造する場面で使用する銅、あるいは青銅器そのものを長江文明から入手していた可能性がある。黄河の中流域および下流域に良質な銅山がなかった。隋唐時代になっても状況は同じである。

しかし隋が華北と華中、華南を統一した後、貨幣経済が全面展開する。隋も唐も多量の銅貨を鋳造して発行する必要に迫られた。長江流域で採掘する銅だけでは多量の銅貨を鋳造できない場合、遼河流域で採掘する銅を取りに行くしかない。だが、当時の遼河流域を支配していたのは高句麗である。そして、高句麗に遼河流域を割譲する考えはない。

むろん隋の文帝と煬帝、唐の太宗の高句麗遠征目的が銅の獲得であったいうのは筆者の憶測である。だが、そのように考えなければ、多大な損害を出しながら遠征を続けた理由、そして太宗の死後、則天武后が唐を約半世紀支配した構造が見えない（歴史家たちは、則天武后の政治手法や人材登用を重視するが、それらだけで大唐帝国を約半世紀支配できるはずがない）。

太宗の死後、高宗（在位649～683年）が即位する。しかし政務は則天武后が担う。そして668年、唐と新羅の連合軍が高句麗を挟撃して滅ぼす。その後唐と新羅は戦火を交え、新羅の領土が朝鮮半島内に止まる。遼河以東から鴨緑江までの広い地域が唐の版図になり、唐の銅不足が解消した。則天武后が唐を支配した約半世紀間、民乱がまったく起きていない。朝廷が多量の銅貨を鋳造して発行し、貨幣経済が進展したためである。

（他方、均田制が形骸化し、荘園が巨大化する。荘園の巨大化は主要農作物の種類の変化も関係しているように思う。則天武后の治世下で、華北の主要農作物が粟やモロコシから小麦に変化した。作付けは粟やモロコシより悪くなるが、小麦は貨幣経済下の商品作物である。長安や洛陽で饅頭や麺類の需要が増大し、華中や華南でも小麦の栽培がはじまる。府兵制も形骸化した。中国では、魏普南北朝時代の宋が軍政と民政を分割し、北魏が軍鎮制を実施した。軍鎮制は戸籍を兵籍と民籍に分割する制度である。軍鎮制下では、兵籍下にある成年男子だけが兵役につく。しかし隋と唐は府兵制を実施して兵籍と民籍をひとつにまとめ、戸籍をすべて兵籍化した（歴史家たちは、戸籍を民籍に一元したと論じているが、筆者の認識では兵籍一元である）。とはいえ、中世の府兵制と近代の徴兵制は民衆の負担がまるでちがう。近代国家は、徴兵制下であれ募兵制下であれ、国家が兵に武具や兵器を与える。だが、中世帝国では、兵が自前で武具を用意しなければならない。しかし鉄は貴重品であった。したがって、戸籍を兵籍に一元しても、自前の鉄製武具を用意できない成年男子は兵役につけない。結局、唐は府兵制と寡兵制を併用する。唐は、版図内の辺境に藩鎮を置き、貨幣経済の下で傭兵を雇い、配置した。そして皇帝が任命する節度使が傭兵を束ねる。ちなみに、中国で鉄製の農具が普及したのは南宋期である。隋唐時代の日本の荘園、すなわち奈良時代や平安時代前期の日本の荘園は領主が農民に鉄製農具を貸し出す場合が多かった）

則天武后の死後、中宗が復位するが、しばらくして玄宗（在位712～756年）が即位する。玄宗の治世前半は「開元の治」と呼ばれ、唐の絶頂期であった。しかし拡大しすぎた版図の防衛に苦慮する。

（科挙をはじめたのは隋であるが、隋は「小さな政府」の中世帝国である。隋の科挙は国教を仏教に一元した場面で減少した文官を補充するための手段にすぎない。しかし唐は国教一元を断念し、道先仏後策を実施した。そのため官僚機構が肥大し、「大きな政府」の中世帝国になる。唐の歴代皇帝は、肥大した官僚機構に対応可能な人材を確保するために、科挙を重視したように思う。ちなみに、科挙が文官採用試験として定着したのは北宋期である）

他方、貨幣経済の下で荘園が巨大化し、均田制と府兵制が形骸化した。玄宗の治世下で、「大きな政府」の唐は財政難に陥る。唐は、傭兵に十分な報酬を支払えなくなった。751年のタラス河畔の戦いで唐軍がアッバース朝イスラーム帝国軍に敗れ、同年、南詔国軍にも敗れたが、敗因はおそらく兵員と武具の不足である。傭兵の報酬は銅貨と絹であったが、報酬が十分支払われなければ傭兵は反乱を起こす。755年、安史の乱が勃発した。

以下の表（表2）は、代表的な藩鎮をまとめた表である。兵員数がもっとも多い藩鎮は幽州である。幽州は現在の河北省および遼寧省で、すなわち遼河流域である。安史の乱の首謀者であった安禄山は、幽州の范陽節度使と太原の河東節度使、営州の平盧節度使を兼務していた（コラム28）。

表2

所在地	節度使名	兵員数	設置年度
幽州（現在の河北省と遼寧省）	范陽節度使	91400	713年
太原（現在の山西省）	河東節度使	55000	711年
営州（現在の吉林省）	平盧節度使	37500	719年
成都（現在の四川省）	剣南節度使	30900	714年
広州（現在の広東省）	嶺南五府経略使	15400	711年
涼州（現在の甘粛省。蘭州市周辺）	河西節度使	73000	710年
霊州（現在の甘粛省。敦煌市周辺）	朔方節度使	64700	721年
鄯州（現在のチベット自治区）	隴右節度使	75000	713年
亀茲（天山南路。南シルクロード）	安西節度使	24000	710年
庭州（天山北路。北シルクロード）	北庭節度使	20000	712年

安史の乱（755～763年）以前の藩鎮制は、ビザンツ帝国のテマ制＝軍管区制に似ている。しかし安史の乱後、唐は軍役と徴税を各藩鎮に委ねる。唐の藩鎮数が50前後になり、兵員の大多数が傭兵になる。各藩鎮は、税の3分の2を傭兵の報酬等で使い、残り3分の1を朝廷に送った。だが、各藩鎮が真面目に税の3分の1を朝廷に送ったとは考えにくい。とりわけ河北（幽州、太原、営州）の三藩鎮は、安禄山と史思明を「二聖」と呼びたたえ、独自の税を徴税して傭兵の報酬にあてたりした。805年に即位した憲宗（在位805～820年）が三藩鎮を鎮撫したが、その後の朝廷は無力である。

780年、財政難に陥った唐は両税を実施する。両税は安史の乱以前に実施した戸税を改正した税制で、保有する農地の大きさに応じて課税する農税である。人頭税ではないが、事実上の国税で、荘園で働く小作農や奴隷＝奴婢も課税の対象になり、しかも納税を物納から金納に変更した。そのため銅貨が不足し、唐は深刻なデフレに陥る。

840年に即位した武宗は、廃仏政策を断行して寺院が隠匿する銅や銅貨を収奪し、同時に寺院が保有する荘園の公田化を試みた。だが、武宗は846年に死去し、後を継いだ宣宗（在位846～859年）は仏教を保護する。

宣宗の死後、裘甫（きゅうほ）の乱が勃発した。勃発した場所は現在の浙江省である。当初、裘甫率いる反乱軍は100名程度であったが、官僚機構の衰退と腐敗は江南地方にも及んでいた。地方軍は反乱を鎮圧できず、反乱軍は約3万名に膨らむ。王式率いる官軍が反乱軍を鎮圧するが、地方軍が蘇生する場面はなかった（コラム29）。

（ほぼ同時期に、ユーラシア大陸東西の中世帝国で物品貨幣が消滅した。コラム26で述べたが、唐が両税法を実施した頃のイサウリア朝ビザンツ帝国も徴税を金納化している。そしてアモリア朝期に小作農や奴隷からも人頭税を徴税する。とはいえ、ビザンツ帝国が深刻なデフレに陥る場面はない。理由は、金貨の質＝純金含有量を落として金貨の発行量を増やし、金貨や銀貨を補う手段として銅貨も発行したからである。すなわち、ビザンツ帝国はインフレ政策を実施して貨幣経済を維持した。だが、唐はインフレ政策を実施していない。太宗の頃の唐は、銅貨と絹が貨幣であったが、則天武后の治世下で銅貨の数量が増大し、玄宗の頃に絹が貨幣機能を喪失した。安史の乱後、絹が貨幣機能を回復するが、貨幣経済の再構築につながらなかった。ちなみに、物品貨幣は亜周辺で再生し、長く残る。すでに述べたが、日本はその典型である）

コラム27： 文選

清少納言は、枕草子に、「文（ふみ）は文集。文選、新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文」と記している。どのようにして学んだかはわからないが、文集と文選、史記と五帝本紀を読破していたとすれば、清少納言は漢文に精通していたというしかない。

紫式部は、「だから男にモテないのだ」といったようだが、男性の視点で清少納言を見下しているように思う（ひょっとして、紫式部は「男」だったのかもしれない）。とはいえ、たんに「文は文選」と書くほうが清少納言らしい。むろん平安時代の女官は白居易の詩集＝文集を暗誦するくらいの教養を必要としたのかもしれない。しかし中世東洋文学の中心は文選であり、その他は文選の周囲を回る惑星のような存在であった。 清少納言は、たんに「文は文選」と書くだけでよかった。

その文選は、南朝の梁で編纂された。中心人物は武帝の長子＝昭明太子である。筆者は漢文に疎いが、南朝宋代に隠遁生活を過ごした陶淵明の漢詩に仏教的なものを感じない。全体として、文選にも仏教的なものを感じない。だからこそ、文選は科挙受験者の必読書になったのかもしれないが、しかし「皇帝菩薩」と呼ばれた武帝が君臨する梁で編纂された書物であるにもかかわらず仏教色が薄いとすれば、中世帝国は政治や軍事と文学に大きな隔たりがあった、というしかない。

題材は豊富にあった。しかし魏普南北朝時代の中華帝国に叙事詩や物語がない。同時代のビザンツ帝国やサーサーン朝ペルシャにも叙事詩や物語がない。ボエティウスの「哲学の慰め」は文学作品ではないし、「シャーナメ」や「シーリーン」はサーサーン朝ペルシャが滅んだ後に書かれた後世の叙事詩あるいは物語である。漢詩が尊ばれた隋唐時代の中国、アッバース朝イスラーム帝国も同様である（「千夜一夜物語」も後世の作品である）。

他方、中世帝国の亜周辺で多くの叙事詩や英雄物語が語られている。たとえば、「ベーオウルフ」や「ニーベルンゲンの歌」、「ローランの歌」などである。インドでも「ラーマヤーナ」や「マハーバーラータ」が語られている。日本の「古事記」やアイヌの「ユーカラ」も同様である。

中世帝国は理知的な帝国であった。そこが、中世のつまらないところである。しかし古代帝国は情緒的な帝国であった。残存数は少ないが、古代は叙事詩や物語が豊かである。多くの人が中世史より古代史を好むのはそのためかもしれない。

コラム28： 唐の四大商都

唐の首都は長安（現在の陝西省西安市）である。当時の長安の人口は約100万で、世界最大の都市であった。しかし特筆すべきことは、長安の他にも大都市が多数存在していたことである。とりわけ洛陽（現在の河南省洛陽市）と揚州（現在の江蘇省揚州市）、成都（現在の四川省成都市）と広州（現在の広東省広州市）を軽視できない。

洛陽は黄河と大運河の交差点で、長安に送る農産物や特産品の集積地であった。当時の洛陽は「天下の台所」である。洛陽の人口も100万を超える場面があったといわれている。揚州は塩＝海塩の産地で、長江と大運河、海岸の交差点でもあった。成都は絹と紙の産地である。揚州の人口は50万～60万、成都の人口も揚州とほぼ同じであったといわれている。洛陽と揚州、成都は商都であった。広州も商都であるが、大都市になったのは玄宗の代である。東南アジアや南アジア、西アジアの貿易船が広州に停泊した。広州は事実上の「貿易特区」で、外国人の住居も多数存在した。黄巣の乱が勃発した場面で、12万の外国人が殺害されたとの記録もある。

ところで、唐の主要な輸出品は絹と陶磁器、茶である。唐から絹や陶磁器をもっとも多く輸入したのはおそらくアッバース朝イスラーム帝国である。茶をもっとも多く輸入したのも、飲酒が禁止されているアッバース朝イスラーム帝国である。問題は、ペルシャ商人やアラブ商人が、正貨が銅貨＝開元通宝の唐で、彼らの正貨＝銀貨で絹や陶磁器、茶の対価を支払うことができたか否かである。筆者の憶測であるが、答えは「否」である。

唐にも金貨や銀貨が存在した。だが、筆者が調べた限り、金貨と銅貨、銀貨と銅貨を交換する公定レートがない。唐では、金銀が貨幣化していない。金銀は「宝石」と同じである。ペルシャ商人やアラブ商人は、おそらく金銀で購入したインドシナ半島産の宝石やインドネシア諸島産の香料で絹や陶磁器、茶の対価を支払った。金貨と銅貨、銀貨と銅貨の交換関係の下で崩壊した貨幣経済を再構築できなかったことが、唐の滅亡につながる。中国で銀＝銀貨の流通がはじまるのは北宋期である。

コラム29： 三武一宗の法難

歴史家たちは、北魏の太武帝と北周の武帝、唐の武宗と後周の世宗が実施した廃仏を「三武一宗の法難」と呼んでいる。だが、廃仏をたんなる仏教弾圧あるいは信仰弾圧と見ることはできない。背後に国教と国教会、貨幣経済の問題がある。

北魏の太武帝が廃仏を断行したのは長江以北の華北と華中を統一した後である。中華思想に固執する宰相の崔浩が唆したためであるといわれているが、当時の北魏は貨幣経済が未発達であった。他方、南朝の宋で貨幣経済が進展していた。すでに述べたように、貨幣経済の誕生と進展に国教と国教会が不可欠である。崔浩はサーサーン朝ペルシャのカルティールのような役割を担っていたように思う。崔浩は儒教あるいは道教の国教化を目指し、北朝と南朝の統一を目指していた。

北周の武帝は分裂した北巍を再統一した。周礼制の下で政教一致を促進し、儒教を国教化して貨幣経済の進展を目指していたように思う。北周の武帝は574年に廃仏を断行した。だが578年に死去する。その後、帝位を簒奪した隋の文帝が仏教を国教化した。

唐の武宗が廃仏を断行したのは、貨幣経済が崩壊し、デフレが蔓延した時期である。唐の武宗にとって、廃仏は貨幣経済を再構築するための金融改革であり財政改革であった。当時の寺院は金融を営み、巨大な荘園を保有していた。武宗の廃仏目的は、寺院が隠匿する銅や銅貨を外部＝市場に流してデフレを解消し、寺院が保有する荘園を公田化して財政を健全化することにあったと思う。しかし武宗の在位期間は約6年で、彼が廃仏を断行したのは死去する約1年前である。武宗の死後、後を継いだ宣宗は仏教を保護した。

後周の世宗は五代十国時代を終わらせ中国の再統一を目指していた。世宗は廃仏を断行し、寺院の銅の所有を禁じている。世宗の廃仏目的は、純粋に銅と銅貨の獲得であった。世宗は獲得した銅貨で軍を強化した。世宗は中国を再統一する前に死去するが、北宋の太祖と太宗が彼の意思を引き継ぐ。北宋期に仏教が大きく変貌し、儒教や道教も変貌する。

歴史家の多くが、「三武一宗の法難」を上と同様に論じている。だが、筆者の知る限り、国教と国教会、および貨幣経済の同時代性を論じる歴史家がいない。また、寺院への寄進が事実上の「銀行預金」であった可能性を論じる歴史家もいない。しかし貨幣の神秘性は国教に由来する。そして、「広義の中世」の出現期にユーラシア大陸の東西で金融を営んだのは国教会である。

（寺院や教会が金融を営んでいたと論じる歴史家や宗教関係者は少ないが、稀にいる。そして、彼らはそのような国教会の有り様を非難する。だが、中世貨幣経済にとって国教会は不可欠であり、銀行が不在であった時代に金融を営むのは国教会の役割である。彼らが非難しなければならないのは、寺院や教会が金融を営んだことではなく、仏教やキリスト教の国教化である）

３．７　中世帝国の亜周辺

３世紀の「グレート・リセット」後、世界各地で中世帝国が誕生した。それら中世帝国には三つの共通点がある。まず、最高法規＝国教を定め、版図内の統治機構＝国教会を整備した。次に、皇帝が貨幣＝財貨の鋳造と発行を独占し、他の中世帝国の財貨との交換を可能にして統治制度＝貨幣経済を具現した。最後に、執政を軍政と民政に分割し、官僚を武官と文官に分離した。サーサーン朝ペルシャとビザンツ帝国はその典型である。

執政の軍政と民政の分割、および官僚の武官と文官の分離は民政の中央集権化を促進した。だが、軍政の中央集権化は容易でない。したがって、武官と文官が共有する中心、すなわち皇帝が軍政と民政を統合し調停する。だが、他の中世帝国や亜周辺との敵対関係が調停を困難にする場面があった。民政を優先しなければならない場面でも、他の中世帝国や亜周辺との対立が激化すれば皇帝は軍政を優先するしかない。また、官位差が部族差を解消したが、他方、異教や異端が国教と敵対する。そして異教や異端が民乱のテコになる場面があった（中国の中世帝国＝唐は国教を一元できなかったが、支配層が道教に帰依して官位差をつくり部族差を解消した）。

貨幣経済は土地売買を促進し、奴隷売買を促進した。それにより荘園が巨大化し、帝国の税収が減少する。皇帝が改革を行い、また版図を拡大して税収増を目指す場面もあった。しかし版図の拡大は軍事費の増大につながり、財政難が帝国の衰退につながる。「国税」の制定が財政難の歯止めになるが、金融改革（金融を統治機構＝国教会の支配下から離脱させる制度改革等）につながる場面がない。国税の下で物品貨幣が消滅し、商品経済の必要条件が整うが、商品経済の十分条件が整うのは１２～１３世紀頃である。

（筆者は、同時代の中南米も同様であったと考えるが、鉄器が使われた痕跡がない。紀元前１１９０年頃、古代ヒッタイトが崩壊して冶金技術者がオリエント各地に散らばる。そして紀元前４３０年頃からユーラシア大陸各地で鉄器の使用がはじまるが、冶金技術は中南米に伝わらなかった。マヤ文明以前に栄えたオルメカ文明の「鏡」は精錬された鉄の鏡ではない。中南米は鉄鉱石の宝庫であるが、鉄の融点は約１５００℃である。木材や石炭を燃やして１５００℃以上の高温を得るには、炉や窯などを使って高圧空間を具現する技術が必要である。ちなみに、朝鮮半島から日本に冶金技術が伝わったのは１～２世紀頃で、かなり遅い。弥生時代の遺跡からも鉄器が発見されているが、筆者の認識では、それら鉄器は渡来人が持ち込んだものである。彼らは中国から渡来した。紀元前４７３年、越王夫差が呉を滅ぼす。呉は、現在の江蘇省蘇州市周辺（長江河口付近）を支配した春秋戦国時代の古代国家である。呉が滅んだ場面で、呉の難民が九州南部に渡来した。彼らの人口は、日本列島に定住していた縄文人の人口よりはるかに多い（おそらく、４～５倍である）。彼らが鉄器を持ち込み、日本の歴史が縄文時代から弥生時代に変遷する。渡来した呉の難民たちは、水田稲作もはじめた。だが、稲の開花時に台風が九州を襲う場面がおそらくあった。呉の難民たちは北上して台風を回避する。彼らは九州北部に定住し、さらに山陰地方や山陽地方、北陸地方や北越地方、近畿地方や東海地方に定住した。そして朝鮮半島南端が鉄鉱石の産地であることを知る。彼らの一部が、朝鮮半島南端に移住し、冶金＝製鉄をはじめた。私見であるが、金官加羅国を開いた首露王は彼らの末裔である。日本で冶金＝製鉄がはじまったのもその頃で、鉄製武器が「倭国大乱」を誘発した。その後卑弥呼が君臨する邪馬台国が誕生する。本書で、邪馬台国の所在地等を論じるつもりはない。筆者が重視したいのは、邪馬台国が滅んだ後である。歴史家たちがいう「倭の五王」が、魏晋南北朝時代の南朝に使節を送っている。だが、北朝に使節を送っていない。卑弥呼が、三国時代の魏に使節を送ったというのに、彼らは魏晋南北朝時代の北朝に使節を送らなかった。倭の五王が魏晋南北朝時代の北朝に使節を送らなかった理由は、おそらく彼らが呉の末裔であると自覚していたためである。ちなみに、中国雲南省の少数民族ハニ族と弥生人の骨格やDNAが一致している。ハニ族のルーツは中国北西部に住んでいたツングース系の羌人であるとの説があり、当時のハニ族は「和夷」と呼ばれていた。筆者は、弥生人＝日本人が「倭人」と呼ばれた理由はそれである、と考える。和＝倭という文字は、「夷」や「戎」、「蛮」や「狄」ではない。筆者の憶測であるが、日本に渡来した呉の難民の多くがツングース系のハニ族＝和夷＝倭人であった）

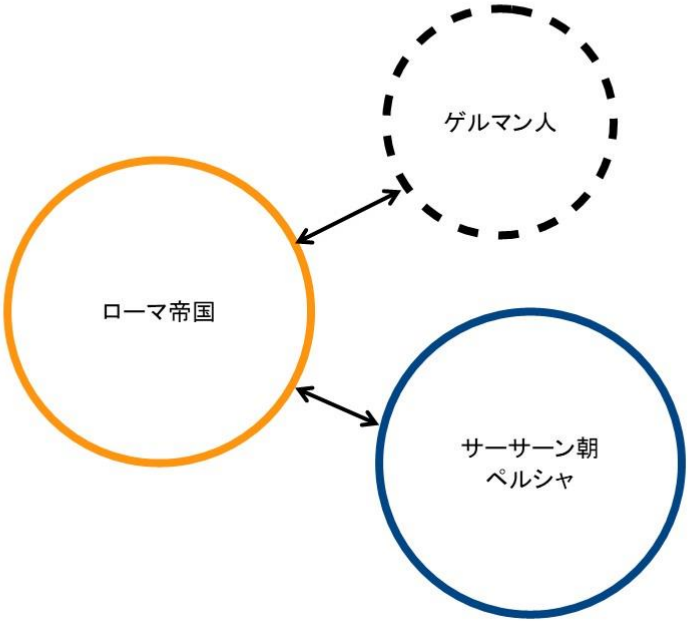
中世帝国の支配者層（皇族や貴族、聖職者）にとって、土地や奴隷は財産であり、版図外で暮らす民衆は荘園で使役する奴隷の源泉である。したがって、版図外で暮らす民衆は中世帝国から遠く離れて暮らすほうが安全である。だが、貨幣経済と貨幣クラスが誕生し、財貨と物品貨幣の交換が容易になっている。版図外で暮らす民衆にとって、財貨は制度（ルール）ではない。道具（ツール）である。版図外で暮らす民衆が財貨を求め、中世帝国の近傍で暮らすようになる。中世帝国の近傍が「亜周辺」化し、亜周辺の支配をめぐる争乱が生じた。そして民衆が離散と集合を繰り返す。

中世帝国は、他の中世帝国と敵対し、戦火を交える場面があった。他方、平和条約や不可侵条約を結び、戦火を回避する場面もあった。だが、亜周辺と平和条約等を締結しても、戦火を回避できない。なぜなら、亜周辺では、支配者層が頻繁に入れ替わるからである。したがって、亜周辺は平和条約等を遵守できない。中世帝国と亜周辺の戦火は恒常化した。

（古代帝国のスキームが中心と周辺、外部であるとすれば、中世帝国のスキームは中心と周辺、亜周辺と外部である。筆者は、柄谷行人氏の著作を通して「亜周辺」という考えを理解し、古代帝国と異質な中世帝国のスキームを発見した。柄谷氏は、ウィットフォーゲルの著作から「亜周辺」という考えを発見されたようだが、筆者の見るところ、ウィットフォーゲルは帝国を古代帝国と中世帝国に分けていない。さらにいえば、世界帝国が古代帝国や中世帝国と異質な近代の産物であるとの認識も持っていないように思う。国民国家、あるいは主権国家は近代の産物である。そして世界帝国も近代の産物である。とはいえ、国民国家は単一言語単一制度空間であるが、世界帝国は多言語多制度空間である。筆者の認識では、古代帝国が中世帝国に変遷し、中世帝国が世界帝国に変遷した。そのような認識がなければ、国民国家＝主権国家と世界帝国の「ちがい」を認識できない。ところが、哲学者や社会学者、政治学者や経済学者の多くが、世界帝国＝多言語多制度空間を近代の産物であると認識することなく「帝国」を語っている。そのため、彼らの帝国と帝国主義のちがいの説明も貧弱である。古代帝国であれ中世帝国であれ、あるいは世界帝国であれ、帝国のスキームは国体＝国家が政体＝政府を内包するスキームで、帝国主義のスキームは政体が国体を内包するスキームである。筆者の考えでは、時間軸上で帝国を仕分けない限り、帝国と帝国主義の「ちがい」をうまく認識できない。そして、自由主義や新・自由主義と帝国主義や新・帝国主義が同じであるかのように見えてしまう場合がある。それについては後述するが、資本＝資本的使用価値の輸出入だけを根拠にして論じる「帝国主義」論は、帝国主義Aか帝国主義Bかの選択を強いられる小国の苦痛を隠蔽し、帝国主義間の交換関係の下で生じる局地戦争や難民問題も隠蔽しかねない）

下図（図6）は、4世紀後半のローマ帝国と他の中世帝国＝サーサーン朝ペルシャ、亜周辺＝ゲルマン人との関係である。

図6　4世紀後半のローマ帝国



すでに述べたが、4世紀後半、ローマ帝国の北東＝亜周辺をゲルマン人が支配する。そしてローマ帝国の版図内に侵入し、富財を略奪する場面が生じた。

テオドシウス1世の死後、ローマ帝国は軍政と民政を東西分割したが、ゲルマン人の「大移動」により、西ローマが滅亡する。ビザンツ皇帝ユスティニアヌス1世が西ローマ版図の奪還を目指したが成果は芳しくなかった。その後イスラーム軍の「大征服」により、東ローマ＝ビザンツ帝国はレヴァント地方とエジプト、メソポタミア北部とキプロス島やロードス島を失う。

7世紀後半、ビザンツ帝国は版図をさらに縮小する。674年、ウマイヤ朝アラブ軍がアルメニア地方とユーフラテス川上流以西を征服してアナトリア高原を超え、コンスタンティノープルを包囲した。ビザンツ帝国は「ギリシャの火」で防戦する。678年、ウマイヤ朝アラブ軍は大嵐とビザンツ海軍の反撃で艦隊を失い撤退する。

ビザンツ帝国は危機を脱したが、その後北方のブルガール人がドナウ川を越えて南下し、ビザンツ軍を撃退する。そして681年、ドニエプル川以西からバルカン山脈まで（概ねバルカン半島北東部）を占領し、ブルガリア王国を建国した。ビザンツ帝国の北の国境がドナウ川からバルカン山脈に後退し、版図が現在のギリシャとマケドニア、小アジア、トラキア地方南部とイタリア半島南部に縮小する。

版図を縮小したビザンツ帝国がギリシャ化およびペルシャ化するのは必然であったように思う。ビザンツ帝国は公用語をラテン語からギリシャ語に変更した。そして官僚機構をサーサーン朝ペルシャ型に変更する。すなわち、すべての属州をテマ化＝軍管区化し、地方の軍政と民政を一体化した。

（とはいえ、サーサーン朝ペルシャ同様、地方に徴税権を譲渡する場面はなかったし、地方が独自の財貨を鋳造して発行する場面もない。したがって、アッバース朝イスラーム帝国のように版図内で王朝が乱立する場面もない。属州のテマ化＝軍管区化により、ビザンツ帝国は文官を約3分の1に削減し、武官も削減するが、貨幣経済の下で荘園が増大したため、悪化した財政を立て直すことができなかった。しかもコンスタンティノープルで疫病が蔓延する。この疫病が後の黒死病と同じであったか否かはわからないが、その後各ギリシャ都市で公衆衛生が進展する）

717年、レオン3世が帝位を簒奪し、ビザンツ帝国の皇統がヘラクレイオス朝からイサウリア朝に変遷する。イサウリア朝ビザンツ帝国は再度のウマイヤ朝アラブ軍の侵攻に耐え、ユーフラテス川上流以西を奪還した。だが、イタリア半島でラヴェンナ市を失い、バルカン半島のマケドニア地方も失う。ラヴェンナ市を奪取したのはランゴバルド王国で、マケドニア地方を奪取したのはブルガリア王国である。

ラヴェンナ喪失後、ローマ教会がビザンツ帝国から離反する。その後ローマ教会はレオン3世のイコノクラスム＝聖像破壊運動擁護に反発し、ビザンツ皇帝への臣従を拒否する（筆者の認識では、これが「カトリック教会」のはじまりである）。

とはいえ、イサウリア朝期のビザンツ帝国は、ウマイヤ朝アラブ帝国がアッバース朝イスラーム帝国に変遷した時期であり、小アジアとユーフラテス川上流以西は概ね安泰であった。741年に即位したコンスタンティノス5世の妃はハザール・カガン国の王＝ビハール・カガンの娘チチャクである。ハザール・カガン国との婚姻関係もビザンツ帝国の安寧に寄与したように思う。

レオン3世もコンスタンティノス5世も政教一致を重視し、イコノクラスムを支持した。目的は教会や修道院が保有する荘園の皇領化である。コンスタンティノス5世の死後、女帝エイレーネーが即位してイコノクラスムを弾圧するが、その頃のイサウリア朝は「目的」を達成していたように思う。

（歴史家の大月康弘氏は、「普遍世界の鼎立（山川出版社）」で、「ビザンツ国家にあっては、9世紀末までに書かれた資料が希薄である。6世紀までは、皇帝から発せられた勅令や、それらを集大成した法書など、豊富な資料素材があった。ところが7世紀以降、ほとんど途絶する」と述べている。ビザンツ帝国の資料が希薄なため、ハザール・カガン国がどのような国であったのかよくわからない。ハザール・カガン国は、7～10世紀に存在した謎の大国で、西突厥滅亡後にキプチャク草原や北コーカサス地方を支配した。ハザール・カガン国とビザンツ帝国の関係は良好であった。ハザール・カガン国とアッバース朝イスラーム帝国との関係も良好であった。ハザール・カガン国の首都イティルの所在地は今も不明であるが、東西交易の中継地として栄えたようである。ハザール・カガン国は、ユダヤ教を国教にしたことで有名であるが、キリスト教やイスラーム教を排除する場面はないし、キリスト教徒やイスラーム教徒を弾圧する場面もない。ハザール・カガン国は、少数部族が多数部族を支配した大国で、ユダヤ教を国教化しても最高法規化、および他部族への強制はできなかったように思う。ちなみに、コンスタンティノス5世に嫁いだチチャクはキリスト教に改宗している）

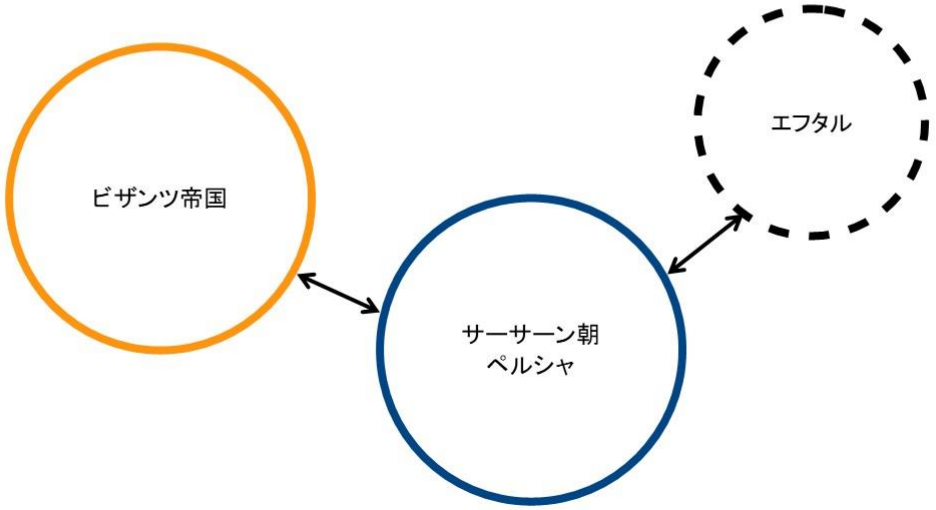
とはいえ、イコノクラスムに反発したローマ教会＝カトリック教会がビザンツ皇帝への臣従を拒否した影響は非常に大きい。キリスト教会はコンスタンティノープル教会＝ギリシャ正教会とカトリック教会に分裂した。フランク王カール1世の死後、カトリック教会は金利を禁止して金貨を発行する。他方、西ヨーロッパ各地の裁判を担う。

すでに述べたが、カトリック教会が金貨を鋳造した場所はフィレンツェである。フィレンツェは、東ゴート王国やランゴバルド王国がイタリア半島を支配していた頃から金貨を鋳造していたが、当時のフィレンツェはローマ教皇領である。「広義の近代」の出現期に、この金貨が「フローリン金貨」になる。

（金貨の発行が、カトリック教会の「力」の源泉になる。ヨーロッパでは、カトリック教会が金貨を鋳造して発行するまで、ビザンツ皇帝が唯一の金貨発行者であった。筆者は、カトリック教会の金貨発行は第二次世界大戦後の米ドル本位制および変動相場制に匹敵する歴史上の重大事件であると考えるが、哲学者や社会学者、政治学者や経済学者たちはあまり重視していない。すでに述べたが、そのため彼らはローマ教皇を「権威」として語り、統治権者として語らない。困ったことに、歴史家の中にもそのような人が大勢いる。また宗教学者たちは、カトリック教会あるいはローマ教皇の金貨発行を、「カエサルのものはカエサルに」という、イエスの教えに反するといわない。ちなみに、ユスティニアヌス法は金利を容認している。すなわち、金貨を発行する場面で、カトリック教会は恣意的にユスティニアヌス法を運用し、金利を禁止した。目的は、ローマ教皇がビザンツ皇帝と対等であり続けるためである。カトリック教会およびローマ教皇が権威化するのは「力」を失った後である。すなわち、金貨の発行を止めた後である。それについては後述するが、カトリック教会あるいはローマ教皇の金貨発行停止は「広義の中世」の成熟期の終わりと「広義の近代」の突破期のはじまりで、市場経済のはじまりでもある）

下図（図7）は、4世紀後半のサーサーン朝ペルシャと他の中世帝国＝ビザンツ帝国、亜周辺＝エフタルとの関係である。

図7　4世紀後半のサーサーン朝ペルシャ



4世紀後半、エフタルがシャープール1世治世下のサーサーン朝ペルシャと同盟を結び、クシャーン朝を挟撃して滅ぼす。そしてバクトリア地方とガンダーラ地方を支配した。その後エフタルはサーサーン朝ペルシャと敵対するが、他方、北インドとモンゴル高原に侵攻する。エフタル侵攻後、北インドのグプタ朝が衰退し、モンゴル高原の高車が滅ぶ。高車滅亡後、柔然がモンゴル高原を支配した（コラム30）。

エフタルの信仰は天神火神信仰である。天神信仰は他の遊牧民にも存在したが、火神信仰は存在しない。おそらく、エフタルの部族信仰と、サーサーン朝ペルシャ王シャープール2世がアヴェスタを編纂する前の原始ゾロアスター教が集合した。

サーサーン朝ペルシャから見るエフタルは、ビザンツ帝国から見るメロヴィング朝フランク王国のような存在であったかもしれない。メロヴィング朝フランク王国同様、エフタルも領土を拡大し、部族の有力者に領地を分配し続ける必要があった。

558年、サーサーン朝ペルシャ王ホスロー1世は突厥と同盟を結びエフタルを挟撃する。そして567年、突厥がエフタルを滅ぼしアム川以東を支配する。だが、その後突厥がサーサーン朝ペルシャに敵対する。突厥は隋の時代に東突厥と西突厥に分裂したが、西突厥がビザンツ帝国と同盟を結びサーサーン朝ペルシャを挟撃した。

サーサーン朝ペルシャとビザンツ帝国、および西突厥の戦争は約20年続いた。サーサーン朝ペルシャもビザンツ帝国も疲弊したが、西突厥も疲弊した。641年、西突厥は唐に帰服し、その後北コーカサス地方でハザール人がハザール・カガン国を建国する。

唐の大宗の死後、西突厥は反旗を翻すが、唐の名将蘇定方が制圧した。657年、西突厥は河西節度使の支配下に入る（西突厥が消滅するのは、741年にウイグルがイリ川以東を支配したときである。ちなみに、ハザール人は西突厥の末裔であるとの説があるが、確証がない）。

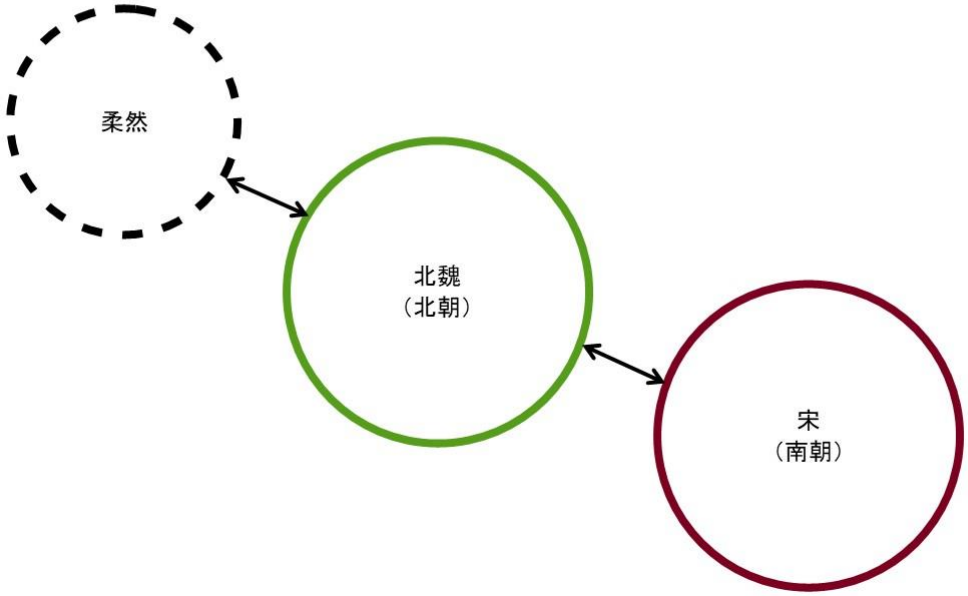
他方、651年にイスラーム軍がサーサーン朝ペルシャを滅ぼす。その後ウマイヤ朝アラブ帝国がアラビア半島とメソポタミア、レヴァント地方やエジプトと支配するが、西突厥が唐に帰服していたため、東方の憂いはなかった。ウマイヤ朝アラブ帝国は版図をメソポタミア全土と北アフリカ全域、イベリア半島の大部分、さらに現在のイランと南コーカサス地方、アフガニスタンやパキスタン、中央アジアのイリ川以西まで広げる。

750年、ウマイヤ朝からカリフの座を簒奪したアッバース朝がイスラーム帝国を開国する。そして、すでに述べたが、タラス河畔の戦いでズィヤード率いるホラーサーン兵団が高仙芝率いる唐軍に大勝する。唐軍は敗北し、唐のタリム盆地（概ね現在の新疆ウイグル自治区）以西の支配が困難になり、中央アジア全域にイスラーム教が広まる。

（タラス河畔の戦いで製紙法がアッバース朝イスラーム帝国に伝わったとの説があるが、タラス河畔の戦い以前からサマルカンドで紙の製造が行われていたらしい。サマルカンドで製造した紙が、イスラーム教の布教だけでなく、古代ギリシャの哲学や自然学の保存に役立ったように思う）

下図（図8）は、5世紀前半の北魏（北朝）と他の中世帝国＝宋（南朝）、そして亜周辺＝柔然との関係である。

図8　5世紀前半の中国



5世紀前半、北魏の亜周辺＝モンゴル高原を柔然が支配した。柔然はさらに遼河下流域からイリ川流域までの北方を支配する。そして北魏と敵対した。柔然と北魏の敵対関係は北魏が東魏と西魏に分裂する535年まで続く。すなわち、柔然と北魏の敵対関係は100年以上続いた。

原因は不明であるが、北魏分裂後、柔然も力を失う。そして突厥が柔然を滅ぼし、モンゴル高原を支配する（突厥部族の生誕地は鉄鉱石が豊富なバイカル湖北方のエニセイ川上流であったといわれている。彼らは遊牧民であったが、高度な冶金技術も有していた）。

突厥を開国した部族長はイリ・カガン（伊利可汗）である。彼は西魏と同盟を結んで柔然を撃破し、「大可汗」を号した。他方、彼の弟イステミ・カガン（室点蜜可汗）がサーサーン朝ペルシャと同盟を結びエフタルを滅ぼす。だがホスロー1世が絹の陸路輸送を拒否したため、イステミ・カガンはビザンツ帝国と同盟を結びサーサーン朝ペルシャを挟撃しはじめる。

イリ・カガンの死後、彼の長男イツショクキ・カガン（乙息記可汗）が大可汗に即位する。イツショクキ・カガンは553年に死去するが、彼の死後、イリ・カガンの次男ムカン・カガン（木汗可汗）が大可汗に即位し、柔然を撃退してモンゴル高原を支配する。ムカン・カガンは北周の武帝と婚姻関係を結び、北斉討伐に尽力した。

572年、ムカン・カガンが死去し、イリ・カガンの三男タトパル・カガン（他鉢可汗）が大可汗に即位する。他方、西方では576年にイステミ・カガンが死去し、彼の嫡男タルドゥ・カガン（達頭可汗）が後を継いでサーサーン朝ペルシャとの戦闘を継続した。

577年に北斉が滅ぶと、タトパル・カガンは反旗を翻して北斉の再興を誓い、北周に敵対する。だが、彼は581年に死去する（タトパル・カガンは仏教に帰依し、伽藍を建立して仏典を収集している。彼が北周に敵対した原因は、おそらく仏教の庇護である）。タトパル・カガンの死後、イツショクキ・カガンの嫡男イシュバラ・カガン（汗沙鉢略可汗）が大可汗に即位する。

イシュバラ・カガンが大可汗に即位した同年、楊堅が北周から帝位を簒奪して隋を開国した。イシュバラ・カガンは学問を好み、周礼を尊重していたようである。しかも楊堅が帝位を簒奪する前年、北周の皇女千金公主を娶っている。イシュバラ・カガンは隋軍と戦った。しかし582年、隋軍に大敗し、隋に帰順する。隋の文帝＝楊堅は千金公主に楊姓を与え、楊家の一員にした。その後千金公主は「大義公主」と称するようになる。

隋軍と戦う場面で、イシュバラ・カガンはムカン・カガンの子息にアパ・カガン（阿波可汗）の称号を与えた。アパ・カガンは突厥軍の一翼を担い、隋軍と戦ったが、隋に帰順した後のイシュバラ・カガンはアパ・カガンの粗暴を嫌う。イシュバラ・カガンに嫌われたアパ・カガンは、サーサーン朝ペルシャと対峙していたタルドゥ・カガンを頼る。アパ・カガンを支持する部族も同行し、イリ川流域からアム川流域で新たな遊牧生活をはじめる。

587年、イシュバラ・カガンが死去し、彼の弟ヤブグ・カガン（葉護可汗）が大可汗に即位する。ヤブグ・カガンは西征してアパ・カガンを生け捕る。だが、その後サーサーン朝ペルシャと戦い戦死する。

ヤブグ・カガンの死後、イシュバラ・カガンの長子トラン・カガン（都藍可汗）が大可汗に即位する。トラン・カガンは隋に朝貢したが、タルドゥ・カガンが敵対する。隋の文帝が仲裁し、二人の大可汗の朝貢を承認する。突厥は「東突厥」と「西突厥」に分裂した。

だが、トラン・カガンの弟が隋に接近し、テリス・カガン（突利可汗）を号する。トラン・カガンは激怒し、敵対していたタルドゥ・カガンと和解して隋に侵攻した。しかし隋軍は突厥軍を撃退する。その後隋の文帝はテリス・カガンにケイビン・カガン（啓民可汗）の称号を与え、宗女義成公主を降嫁した。隋の支援を得たケイビン・カガンはトラン・カガンを倒す。タルドゥ・カガンは吐谷渾に奔走した。その後ケイビン・カガンは鉄勒を支配し、隋は吐谷渾を撃退して現在の青海省を支配する。

609年、ケイビン・カガンが死去し、彼の長子＝シヒツ・カガン（始畢可汗）が大可汗に即位する。そして故ケイビン・カガンの妻、すなわち義成公主を娶る。

シヒツ・カガンは隋に朝貢したが、煬帝が三度目の高句麗遠征に失敗した翌年（615年）、隋に侵攻する。急遽隋軍が結集したため、シヒツ・カガンと東突厥軍は撤退したが、その後煬帝は江南の地で遊興に浸りはじめる。617年、唐の高祖＝李淵が長安を目指して出陣する。シヒツ・カガンは李淵に軍馬を送り援軍も派兵した。そして翌年、李淵が唐を開国すると特使を送り賛えた。だがその翌年（619年）、シヒツ・カガンは死去する。

シヒツ・カガンの死後、ケイビン・カガンの次男ショラ・カガン（処羅可汗）が大可汗に即位する。そして故シヒツ・カガンの妻、すなわち義成公主を娶る。翌年（620年）、煬帝の皇后であった蕭氏と煬帝の孫の楊政道、そして隋の文官たちが東突厥に亡命した。しかし同年、ショラ・カガンは唐に朝貢する。その後ショラ・カガンは死去する。

シヒツ・カガンもショラ・カガンも、おそらく義成公主が殺害した。だが、ショラ・カガンの死後、ケイビン・カガンの三男イリグ・カガン（頡利可汗）が大可汗に即位するが、彼も義成公主を娶る。しかし、シヒツ・カガンやショラ・カガンとちがい、イリグ・カガンは唐と敵対する。そして626年、李世民＝唐の太宗が即位した直後、大軍を率いて長安に進軍した。だが、イリグ・カガンと東突厥軍は引き返す（すでに述べたが、太宗は莫大な富財をイリグ・カガンに与えたようである）。

その後寒波がモンゴル高原を襲い、東突厥は疲弊する。そして鉄勒が離反し、630年、唐の名将李靖が東突厥を滅ぼす。イリグ・カガンは捕縛され、義成公主は処刑された。東突厥滅亡後、唐の太宗はテングリ・カガン（天可汗）を号し、モンゴル高原を支配する。その後西突厥や他の西域諸国も唐に臣従した（コラム31）。

歴史家たちは、581年にイシュバラ・カガンが大可汗に即位し、630年にイリグ・カガンが捕縛されるまでの東突厥を「第一突厥帝国（あるいは第一可汗国）」と呼んでいる。しかし、東突厥が軍政と民政を分割していたとは思えない。国教も不明で、貨幣経済が発達していたとも思えない（タトパル・カガンは仏教に帰依していたが、仏教が突厥の国教であったとは考えにくい。仏教が国教であったとすれば、イシュバラ・カガンが周礼を尊重する場面はおそらくない。北周と良好な関係を築くこともできなかったと思う）。

にもかかわらず、東突厥に中世帝国らしさがあるとすれば、義成公主の存在が大きい。義成公主の父母は不明である。彼女は隋の女官だったかもしれない。歴史家たちは、義成公主が歴代大可汗に嫁いだのは、突厥にレビトラ婚（逆縁婚）の慣習があったためである、と論じている。だが、たとえレビトラ婚の慣習があったとしても、二人の兄を殺害したかもしれない高齢の女性を理由もなくイリグ・カガンが娶るとは考えにくい。筆者には、義成公主が意図的にレビトラ婚を行ったような気がする。

彼女は、おそらく長安を中心とする関中の地を奪還し、隋の再興を目指していた。事実、彼女は東突厥に亡命した楊政道を「隋王」に擁立している。唐は彼女を処刑したが、楊政道と蕭氏を庇護した。処刑される前に、義成公主が彼らの助命を嘆願したのかもしれない。義成公主は「女忠臣義士」であった。

東突厥＝第一突厥帝国は630年に滅んだ。そして吐谷渾が勢力を回復し、現在の青海省を再支配する。他方、633年にソンツェンガンポがチベット高原で吐蕃を建国する。

634年、ソンツェンガンポが皇女の降嫁を唐に要求したが、同年、唐の名将李靖が吐谷渾を征服する。太宗はソンツェンガンポの要求を拒否し、支配下の吐谷渾に皇女を降嫁した。638年、怒ったソンツェンガンポ率いる吐蕃軍が吐谷渾に侵攻する。吐谷渾は親吐蕃派と親唐派に分裂し、唐はかろうじて吐蕃軍の侵攻を阻止した。641年、唐は吐蕃に皇女＝文成公主を降嫁する。

すでに述べたように、唐は644年に高句麗遠征を強行した。当時の唐に軍を両面展開する余裕はない。また、軍の両面展開は戦略上の下策でもある。しかもチベット高原の支配より銅を産出する遼河流域の支配が重要であった。したがって、文成公主は義成公主と同様な役割を担っていたように思う。文成公主は役割をはたした。文成公主が降嫁した後、唐と吐蕃の関係が改善する。650年、ソンツェンガンポが死去し、マンソンマンツェンが即位するが、文成公主が健在であったため、唐と吐蕃の良好な関係が続いた。

だが668年に高句麗を滅ぼした後、唐は鴨緑江を越え朝鮮半島を支配しようとする。そのため唐と新羅が戦争状態に陥る。他方、670年に吐蕃軍が安西四鎮（亀茲等）に侵攻し、天山南路＝南シルクロードを支配した。軍の両面展開を強いられた唐は新羅に敗北し、吐蕃にも敗北する（文成公主は存命であったが、おそらく高齢のため、吐蕃の政治や軍事に関与できなかったように思う。彼女は680年に死去する）。

710年、唐の金城公主が吐蕃に降嫁する。そして青海湖（青海省のほぼ中心にある湖。広さは琵琶湖の約8．5倍）を唐と吐蕃の国境と定めた。吐蕃との関係を修復した唐は751年に南詔国（現在の雲南省および四川省の一部を支配していた王国）に侵攻した。だが南詔国軍は唐軍を撃退し、その後吐蕃と同盟を結ぶ。

754年、吐蕃と南詔国の同盟軍が唐の大軍を撃破する。そして763年、安史の乱で疲弊した唐に吐蕃軍が侵攻した。吐蕃軍は概ね現在の青海省と甘粛省を支配し、長安を一時占領する（コラム32）。

コラム30： グプタ朝とヴァルダナ朝

インドのグプタ朝の首都はマガダ国やマウリヤ朝と同じパータリプトラ（現在のインド北東部ビハール州パトナ市）である。320年、チャンドラグプタ1世がグプタ朝を開き、彼の死後、彼の嫡男サムドラグプタ（在位330～380年）が版図を北インド全体に広げる。彼の死後、彼の長男ラーマグプタが即位するが、何らかの理由で廃位あるいは殺害され、弟のチャンドラグプタ2世（在位380～414年）が即位する。チャンドラグプタ2世の代が、グプタ朝の最盛期である。

グプタ朝は国教（古代バラモン教を継承するヒンドゥー教）を発明してマヌ法典を編纂し、サンスクリット語を公用語化した。そして統治機構を整え、マヌ法典とサンスクリット語に精通するバラモン僧を官吏にする。バラモン僧はインド各地に赴任した。地方に赴任したバラモン僧が、インド全域にヒンドゥー教を広める（グプタ朝は国教＝ヒンドゥー教を発明したが、異教＝仏教に寛容であった。コラム11でも述べたが、法顕がインドに渡ったのはグプタ朝期である）。

グプタ朝は良質な金貨や銀貨を鋳造して発行した。金貨はビザンツ帝国との交易、銀貨はサーサーン朝ペルシャとの交易で使われたように思う。グプタ朝は銅貨も鋳造して発行した。銅貨は低額貨幣として使われた。子安貝も低額貨幣として使われたようである。

グプタ朝は、ナーランダ大学（ナーランダ僧院）を建設し、学長アーリヤバタの下で数学や天文学、化学や医学が発展する。文学も開花した。グプタ朝期に、「マハーバーラータ」と「ラーマヤーナ」が完成したが、他にもカーリダーサが「シャクンタラー」や多数の作品を書き残している。

（筆者の認識では、グプタ朝は本節の最初で述べた「中世帝国の三つの共通点」を満たしている。すなわち、インドでも同時代のビザンツ帝国やサーサーン朝ペルシャと同様な形態の中世帝国が誕生した。ビザンツ帝国やサーサーン朝ペルシャとグプタ朝の比較は、やってみるだけの価値があるかもしれない）

5世紀頃からエフタルがインドに侵攻し、6世紀中頃にグプタ朝を滅ぼす。その後ハルシャ・ヴァルダナ（在位606～647年）がヴァルダナ朝を開く。ハルシャ・ヴァルダナはヒンドゥー教から仏教に改宗している。ハルシャ・ヴァルダナの死後、ヴァルダナ朝は滅亡し、インドは「ラージプート時代」と呼ばれる群雄割拠の時代に突入して王朝が乱立する（ちなみに、玄奘がインドに渡ったのはヴァルダナ朝期である。彼はナーランダ大学で学んだ）。

ラージプート時代（ヴァルダナ朝が滅亡した後、1206年に奴隷王朝がはじまるまで）のインドで乱立した王朝のほとんどがヒンドゥー教王朝である。とはいえ、パータリプトラを中心にパーラ朝（750～1174年）のような仏教王朝が栄える場面もあった。

ラージプート時代のインド史は面白い。パーラ朝とプラティーハーラ朝（750～1018年）、ラーシュトラクータ朝（753～973年）の鼎立関係は中世インドの「三国志」である。他方、メーワール王国のように独立を保ち1947年まで続いた王朝もある。だが、それらについて論じることは、本書の主旨から大きく離れる。本書では、ラージプート時代のインドに言及しない。

コラム31： 第二突厥帝国

唐が新羅に敗北し、吐蕃にも敗北した後、東突厥が再興する。682年、クトゥルがイリグ・カガン（頡利可汗）の末裔と称し、自身をイルティリシュ・カガンと号して河北に侵入した。その後中国北辺の各地に侵入する。イルティリシュ・カガンの死後、彼の弟がカプガン・カガンと号し、中国北辺への侵入を繰り返す。

693年、唐はカプガン・カガンを懐柔する。698年、カプガン・カガンは唐に農地の提供を求め、皇族との縁組も求めた。しかし当時の唐は、690年に則天武后が即位し、国号を周＝武周に改めていた。則天武后は皇族のひとりを送るが、彼は李氏ではなく武氏の縁者であった。

だが、カプガン・カガンが求めていたのはテングリ・カガン（天可汗）すなわち太宗＝李世民の末裔である。テングリ・カガンの末裔を得なければ、カプガン・カガンは残存する西突厥や他の部族を束ね大可汗に即位できない。カプガン・カガンは唐朝再興を旗印にして長安に進軍し、各地で武周軍を撃破する。急遽中宗が皇太子に復位したため、カプガン・カガンは引き返したが、唐朝再興の大義は大きかった。カプガン・カガンは部族の結集に成功する。

705年、則天武后が死去する。711年、唐はカプガン・カガンに皇女＝金山公主を降嫁した。唐と東突厥の関係は改善するが、その後東突厥の西南でイスラーム勢力が台頭し、北東でウイグルが台頭する。そして745年、ウイグルが東突厥を滅ぼしモンゴル高原を支配する。歴史家たちは、682～745年まで存在した東突厥を「第二突厥帝国（あるいは第二可汗国）」と呼んでいる。

（ちなみに、則天武后はカプガン・カガンを蛮人と罵り遵法を命じたようであるが、カプガン・カガンは法より掟に従った。筆者には、隋唐時代の中国は、「中原の民」より「草原の民」のほうが儒教に帰依していたような気がする。隋唐時代の中国の統治体制は文治体制である。そして、道教や仏教が「法」で儒教が「掟」であったのかもしれない）

ところで、745年にウイグルが東突厥を滅ぼし、750年にアッバース朝がウマイヤ朝からカリフの座を簒奪し、そして755年に安史の乱が勃発した。750年前後に生じたそれら三つの事件につながりはない。だが、三つの事件は「広義の中世」の出現期の終焉を示唆している。中世帝国も亜周辺も肥大した貨幣経済に対応する新たなスキームの構築に迫られていた。770年前後から、「広義の中世」の突破期がはじまる。

コラム32： 長慶会盟

唐と吐蕃の平和条約＝長慶会盟を記した石碑＝唐蕃会盟碑が今もチベット自治区のラサ市に残っている。内容は、国境を策定した不可侵条約であるが、現在の中国は、唐と吐蕃の合併を意味するものである、と解釈している。そして、1948～1951年に行ったチベット侵攻を正当化している。

当然、チベット亡命政府は反発しているが、問題はその先にある。仮に長慶会盟が唐と吐蕃の合併を意味するもので、中国がチベット自治区（および青海省と甘粛省、四川省と雲南省の一部）を支配する根拠であるとすれば、新疆ウイグル自治区（および内モンゴル自治区等）を支配する上でも同様な根拠が必要になる。しかし、中国は別の理由で新疆ウイグル自治区を支配している。すなわち、中国はダブルスタンダードの下でチベットの高度な自治権要求とウイグルの独立運動を弾圧している。

とはいえ、「歴史的固有の領土」などという「領土」は存在しない。チベットやウイグルの人々が固有の歴史や民族のちがい等を根拠にして運動を続ける限り、不幸が続く。チベットやウイグルの人々は、中国全体の刷新を要求すべきだ。もっとも要求すべきことは、信仰の自由である。

ところで、唐の武宗は廃仏を断行したが、同じ頃、吐蕃のラン・ダルマ王も廃仏を断行している。これを偶然の一致と見ることはできない。廃仏政策はどちらも失敗するが、唐にとっても吐蕃にとっても、仏教＝国教は「お荷物」になっていた。唐でも吐蕃でも貨幣経済が疲弊し、社会は新たな金融制度を必要としていた。しかし、廃仏を断行した唐も吐蕃も新たな金融制度を発明できなかった。ユーラシア大陸西部の状況も同じである。

だが、商品経済が誕生する。そして、商品経済の下で貨幣経済が変貌する。そこから「広義の近代」がはじまるが、ユーラシア大陸西部で最初に商品経済が誕生した国家はコムネノス朝ビザンツ帝国である。ユーラシア大陸東部で最初に商品経済が誕生した国家は南宋である。